

# 漆 町 遺 跡

第一小学校改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010.3

石川県小松市教育委員会



## 例 言

1. 本書は、小松市白江町ハ73番地1に所在する小松市立第一小学校の校舎改築事業に伴い、平成21年度に小松市教育委員会が実施した漆町遺跡発掘調査にかかる報告書である。
2. 発掘調査および出土品整理、報告書刊行は小松市の単独事業として実施した。
3. 調査地、調査面積、調査期間、担当者などについては次のとおりである。
  - 【調査地】石川県小松市白江町ハ73番地1
  - 【試掘調査期間】平成20年6月16日・17日
  - 【試掘調査担当者】小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室 主査 宮田 明
  - 【発掘調査期間】平成21年4月6日～6月26日
    - うち 1次調査（北側半分）：平成21年4月6日～5月20日
    - 2次調査（南側半分）：平成21年5月25日～6月26日
  - 【発掘調査対象面積】約1,000㎡
  - 【発掘調査担当者】小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室 主査 津田隆志
4. 発掘調査においては、(社)小松市シルバー人材センターに委託して作業員を確保し、4級基準点測量および3級水準測量を(有)北市測量設計に、空中写真撮影および空中写真測量を(株)太陽測地社に委託した。
5. 出土品整理については、津田が担当し、臨時作業員を雇用して洗浄・注記・接合・復元・実測等を平成21年5月11日～11月30日の期間で実施した。なお、石器の実測・観察については宮田の協力を得た。
6. 本書の執筆・編集は津田が行った。空中写真撮影以外の発掘調査の写真撮影および遺物の写真撮影は津田が行った。なお本書の執筆にあたり、小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室 担当参事 望月精司、同主査 宮田明、同主査 川畑謙二より教示を得た。
7. 本書で示す方位は座標北を示す。また、水平基準については海拔高(m)で示してある。
8. 本書中の土層註にある、土色および色相・明度・彩度を示した記号(例えば7.5YR3/1)は、「新版標準土色帖」に基づいたものである。
9. 本調査で出土した遺物をはじめ、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。

# 目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の立地と自然環境	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と発掘調査の経過	4
第1節 調査に至るまでの経緯	4
第2節 発掘調査の経過	4
第3章 遺跡の概要と発掘調査の概要	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 発掘調査の概要	8
第4章 遺構と遺物	10
第1節 調査区域内における遺跡の概要	10
第2節 遺 構	13
第3節 遺 物	25
第5章 まとめ	36

写真図版 1～7

報告書抄録

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 遺跡の立地と自然環境

漆町遺跡は、石川県南加賀地方の小松市にあり、小松市の市街地から東へ約2km隔てたところに所在する。小松市の漆町・金屋町・白江町・若杉町の4町にまたがる比較的広範囲な遺跡であり、遺跡の範囲は約20万㎡にも及ぶとのことである。

小松市は、北西側で日本海に面し、南東部では白山連峰に連なる能美山地と能美・江沼丘陵地に囲まれて、山地・丘陵地が市内のほぼ3分の2を占める。一方、北西部には加賀平野の一部をなす小松・江沼平野があり、この平野は、南加賀最大級の河川である梯川によって形成された沖積平野と、加賀三湖（木場潟・今江潟・柴山潟）周辺部から埋積してできた低湿地に概ね分けられる。そして、日本海に面したところには小松砂丘がある。当遺跡は、こうした小松の自然環境のなかでも、梯川中流域南岸の沖積平野に位置する。

梯川は南加賀最大級の一級河川で、全長42km、流域面積約271km<sup>2</sup>を測る。大日山のふもとの鈴ヶ丘に源を発し、山地・丘陵地の中を小規模な河岸段丘を形成しながら北流。その後、中流域に至ると西へ大きく蛇行するとともに流速を急激に落とし、沖積平野を形成しながら下流に至る。

梯川中流域一帯に広がる沖積平野は、水田耕作の適地として豊かな穀倉地を形成しているが、梯川の緩流と蛇行による氾濫の記録も多く、一帯の旧地形は、氾濫による土砂堆積、浸食、自然堤防の形成等の繰り返しのよって複雑な様相を呈していると考えられている。当遺跡は、こうした梯川中流域に広がる沖積平野のなかに位置している。



図1 小松市の位置

## 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

漆町遺跡が所在している梯川中流域の沖積平野は、石川県内でもとくに遺跡が集中している地域である。これは、農耕適地であることと、弛緩な流れとなった梯川の水運によるものと考えられる。

当遺跡周辺のおもな縄文時代の遺跡には、一針遺跡、横地遺跡がある。一針遺跡からは磨製石斧、横地遺跡からは後期の縄文土器が出土したとのことであるが、詳細は不明である。

弥生時代前・中期においては、梯川中流域での遺跡の立地は希薄であるが、当遺跡の西方2km、JR小松駅の東側に所在する八日市地方遺跡が中期の遺跡として挙げられる。この遺跡は「小松式土器」の標識遺跡として知られていたが、平成5年度から12年度に行われた小松市教育委員会の発掘調査により、北陸における中核的な弥生中期の集落跡として知られるようになった。

弥生時代後期になると、当遺跡のほか、白江梯川遺跡、平面梯川遺跡など、梯川中流域の沖積平野を中心に多数の集落遺跡が出現。古墳時代前期には、他地域からの土器群の流入とともに飛躍的な発展を遂げ、梯川中流域の集落遺跡は、4世紀前半から6世紀前半にかけて隆盛を誇った。

古墳について見ると、当遺跡から南東約1kmの丘陵上に八幡古墳群（八幡遺跡）がある。平成2年度から7年度にかけて、石川県埋蔵文化財保存協会により、後期古墳7基が発掘調査されている。



表1 漆町遺跡周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名	種別	時代
1	島田A遺跡	散布地	古墳～古代
2	平面梯川B遺跡	散布地	弥生
3	平面梯川遺跡	集落跡	弥生
4	上小松遺跡	散布地	平安
5	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世
6	白江堡跡	館跡	室町
7	白江遺跡	集落跡	弥生～中世
8	吉竹B遺跡	堰跡（旧河道）	古墳～古代
9	吉竹遺跡	集落跡	弥生・古墳
10	若杉古窯跡	窯跡	近世末期
11	打越遺跡	散布地	弥生～中世
12	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世
13	一針C遺跡	集落跡	弥生・古墳
14	一針遺跡	散布地	縄文
15	一針B遺跡	集落跡	弥生・古墳
16	定地坊跡	寺院跡	室町
17	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世
18	千代オオキダ遺跡	集落跡	古墳～中世
19	千代小野町遺跡（小野町遺跡）	散布地	古墳
20	千代城跡	城跡	室町
21	千代本村遺跡	散布地	古墳
22	横地遺跡	散布地	縄文
23	古府遺跡	集落跡	平安
24	古府フント遺跡	経塚（消滅）	鎌倉
25	南野台遺跡・古府シマ遺跡	散布地	縄文・古墳・平安・中世
26	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世
27	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世
28	佐々木遺跡	集落跡	奈良・平安
29	八幡遺跡・八幡古墳群・八幡若杉窯	集落跡・古墳・窯跡	縄文～近世
30	若杉オソボ山1号窯跡	窯跡	古墳
31	浄水寺跡	寺院跡	平安・中世
32	大谷口遺跡	散布地	弥生
33	軽海遺跡	散布地	弥生～近世
34	荒木田遺跡	集落跡	縄文・古墳～中世

## 引用参考文献

浅香山木他編 1981 『角川日本地名大辞典 17 石川県』 角川書店

石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡Ⅰ』

石川県立埋蔵文化財センター 1987 『佐々木ノテウラ遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター 1988 『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』

石川県立埋蔵文化財センター 1988 『白江梯川遺跡Ⅰ』

小松市教育委員会 1994・1998・1999 『小松市埋蔵文化財調査だより』第4・8・9号

（社）石川県埋蔵文化財保存協会 1998 『八幡遺跡Ⅰ』



## 第2章 調査の経緯と発掘調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経緯

平成20年6月2日、小松市教育委員会庶務課（以下「庶務課」という）は、小松市教育委員会埋蔵文化財調査室（以下「埋文調査室」という）に対し、小松市立第一小学校校舎の改築工事にかかる埋蔵文化財の取扱いについて、協議書を提出した。

当該地については、周知の埋蔵文化財包蔵地（漆町遺跡）に含まれており、なおかつ、隣にある体育館・プールの建設時には、事前に発掘調査が実施されていた（昭和60年・61年）。そこで、当該地における埋蔵文化財の状況確認を目的として、平成20年6月16日・17日に試掘調査を実施。学校敷地のうち、現況が運動場である区域を対象として試掘坑を14か所設定し、重機により掘削した。その結果、新校舎の建設予定箇所で埋蔵文化財が確認され、埋文調査室は、事業実施にあたっては記録保存（発掘調査）をも含めた適切な保存措置が必要であるとの旨を、庶務課に回答した。

これを受けて庶務課は、平成21年3月31日、新校舎建設箇所で現況が運動場の部分（約1,000㎡）の発掘調査依頼を埋文調査室へ提出。4月より市単独事業として発掘調査を実施するに至った。

なお、発掘調査の実施にあたっては、別に残土置き場を確保することができなかつたため、調査区域を北側と南側の2つに分け、北側の調査時には南側に、南側の調査時には北側に残土を置きながら実施していく必要が生じた。そこで、調査区域の北側半分（6～12Gr）を1次調査区、南側半分（1～5Gr）を2次調査区として、調査区域を2つに分けて発掘調査を実施した。

### 第2節 発掘調査の経過

平成21年4月 6日	発掘調査開始。1次調査区（北側半分）の重機による表土除去開始（4月8日まで）。
4月15日	作業員を入れての作業開始。調査区北側より掘削を進める。
4月11日	SD01を確認（4月17日より掘り下げ、20日に完掘）。
4月30日	SB01を確認。
5月 8日	SD03・04・05を確認（SD03は5月11日より、SD04とSD05は5月12日より掘り下げ。いずれも5月18日に完掘）。
5月13日	SD06を確認（5月14日に掘り下げ、完掘）。
5月20日	1次調査区の空中写真撮影実施。1次調査区の調査完了。
5月26日	2次調査区（南側半分）の調査開始。重機による表土除去。
5月28日	作業員を入れての作業開始。調査区北西側より掘削を進める。
6月 2日	SD05の2次調査区部分を確認（6月3日より掘り下げ。5日に完掘）。
6月 9日	SD07を確認（6月10日に掘り下げ、完掘）。
6月20日	第一校下子ども会育成会が主催する体験発掘を実施。参加者約80名（小学5・6年生とその保護者）。
6月26日	2次調査区の空中写真撮影実施。2次調査区の調査完了。



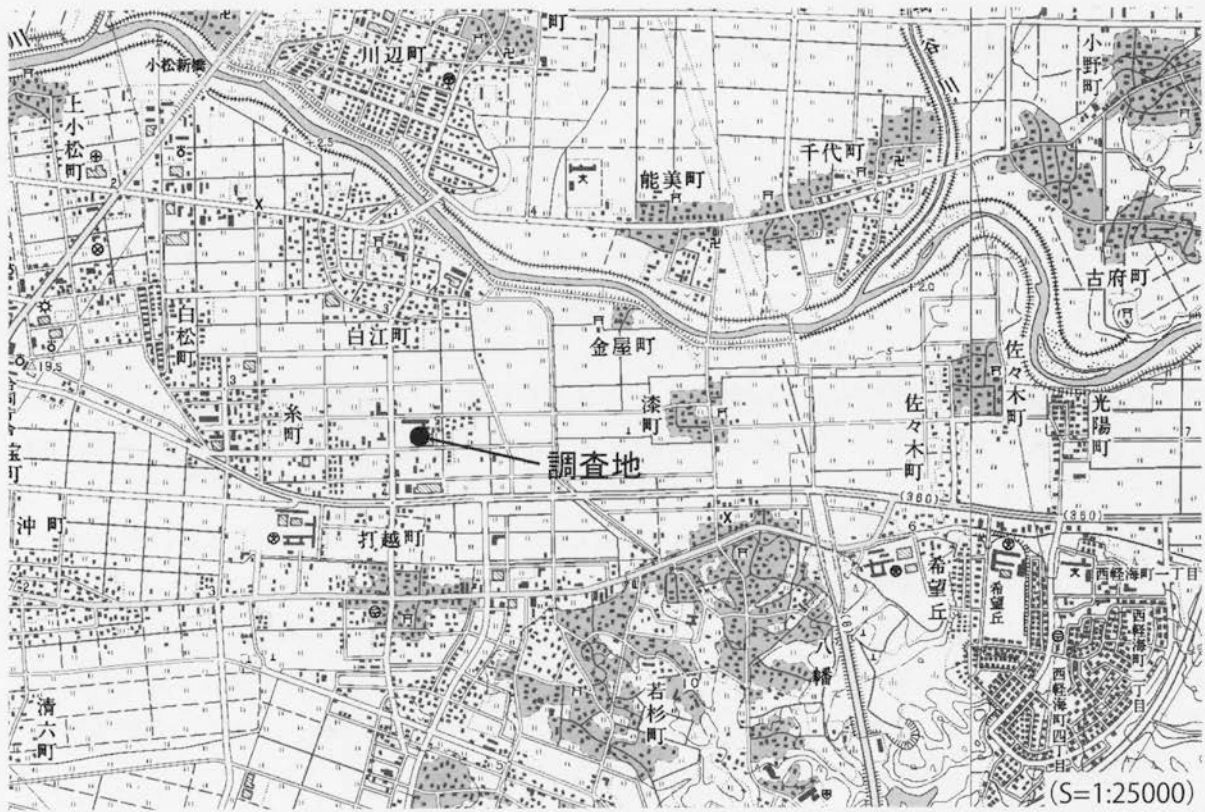


図3 調査対象地 位置図



いる。こうした状況は13世紀まで続き、それ以降は退潮化へ向かうようであるとのことで、金屋・サンバンワリ地区でのみ、南北朝期以降室町時代まで存続するようである。

さて、本報告は第一小学校校地内での発掘調査ということであるが、昭和60年・61年に実施された第一小学校校地内での発掘調査についても触れておく。この調査は、体育館およびプール建設に伴い小松市教育委員会が実施した調査で、体育館建設にかかる調査区域（昭和60年調査実施箇所）は今回の調査区域のすぐ東隣となる。その全体図が下の図5である。掘立柱建物跡9棟、溝7本、土坑2基、竪穴状遺構1基、井戸1基、そして、8・9号掘立柱建物を取り囲むかたちで方形周溝状遺構1基が検出されており、4号溝、10号溝、11号溝の続きと思われる遺構が、今回の調査区域で検出されている。すなわち、4号溝の続きが今回の区域のSD01、10号溝の続きがSD05、11号溝の続きがSD03となる。遺物の出土状況、溝の規模などからみても、このつながりは妥当といえる。なお、規模の大きい3号溝（3号a溝・3号b溝）については、今回の調査区域でそのつながりは見られなかった。おそらく、今回の区域のさらに北側で、東西方向に走っているものと思われる。

引用・参考文献

『漆町遺跡Ⅰ』 1986 石川県立埋蔵文化財センター

『第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告』 1987 小松市教育委員会

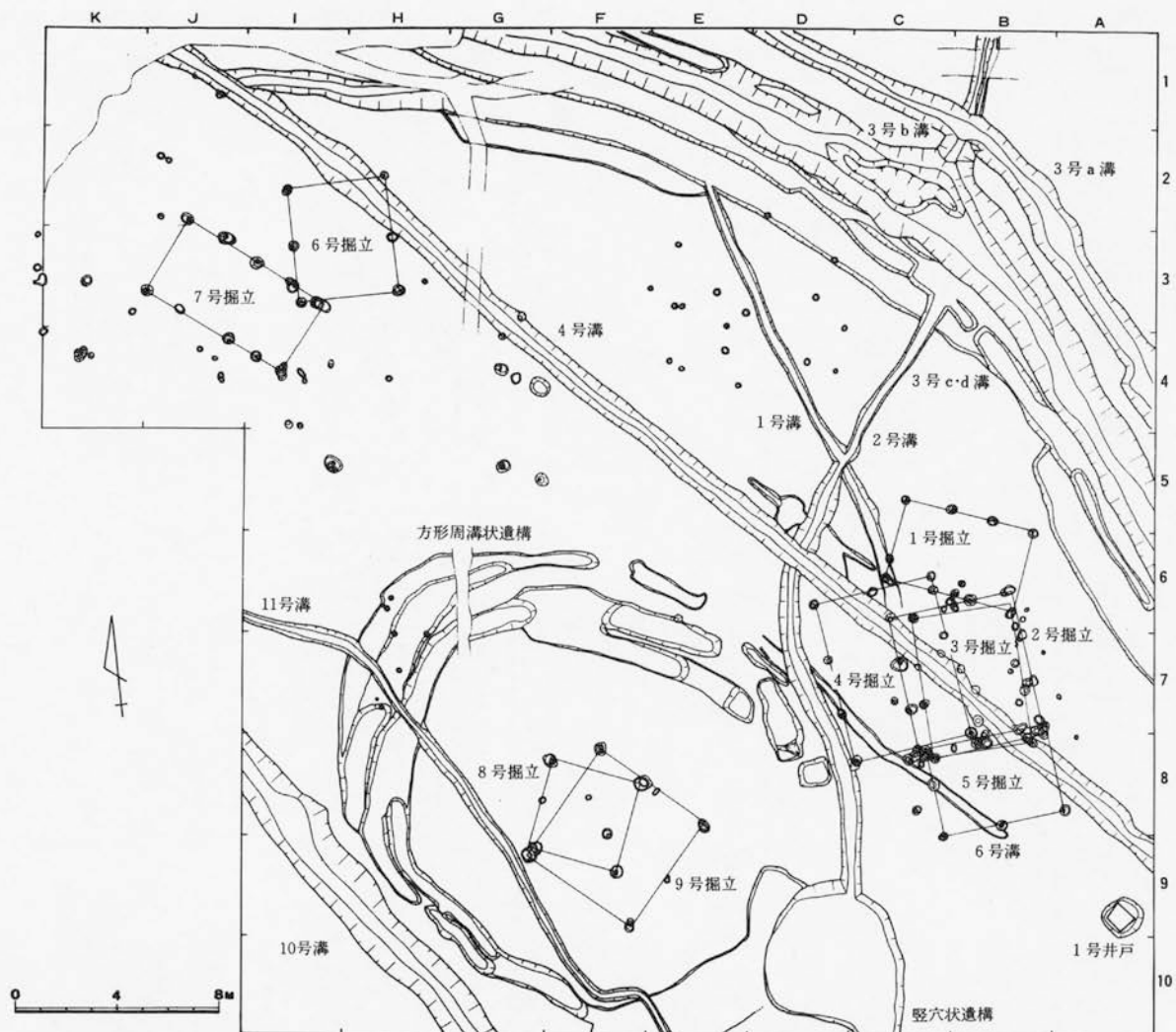


図5 第一小学校校地内 体育館建設にかかる調査区域 全体図（昭和60年調査実施）

## 第2節 発掘調査の概要

今回の調査にあたっては、事前に4級基準点測量、3級水準測量を委託により実施し、4級基準点測量により新設された点を利用して、図6にあるように、公共座標に合わせて、5m×5mのグリッドを配置した。

4月6日より重機を使って表土除去を実施することとなったが、調査区域とは別に残土置き場を確保することができなかつたため、調査区域を北側半分と南側半分の2つの調査区に分け、北側の調査時には南側に、南側の調査時には北側に残土を置いて調査を行った。本報告では、北側の調査区を1次調査区、南側の調査区を2次調査区と呼んでいるが、1次調査区の範囲は6～12グリッド、2次調査区の範囲は1～5グリッドである。

さて、表土除去についてであるが、グラウンドの表面の砂、その下にある碎石、埋立土、旧耕作土（黒褐色（2.5Y3/1）粘土）を重機により掘削し、現況のグラウンド表面よりおおむね1mの深さまで掘り下げた。

その後、先述のグリッド配置に従ってグリッド杭を打設。調査区域周辺の排水溝掘りと水中ポンプの設置、調査区壁面の崩壊を防止するための土のう積み、残土排出のためのベルトコンベアーの設置

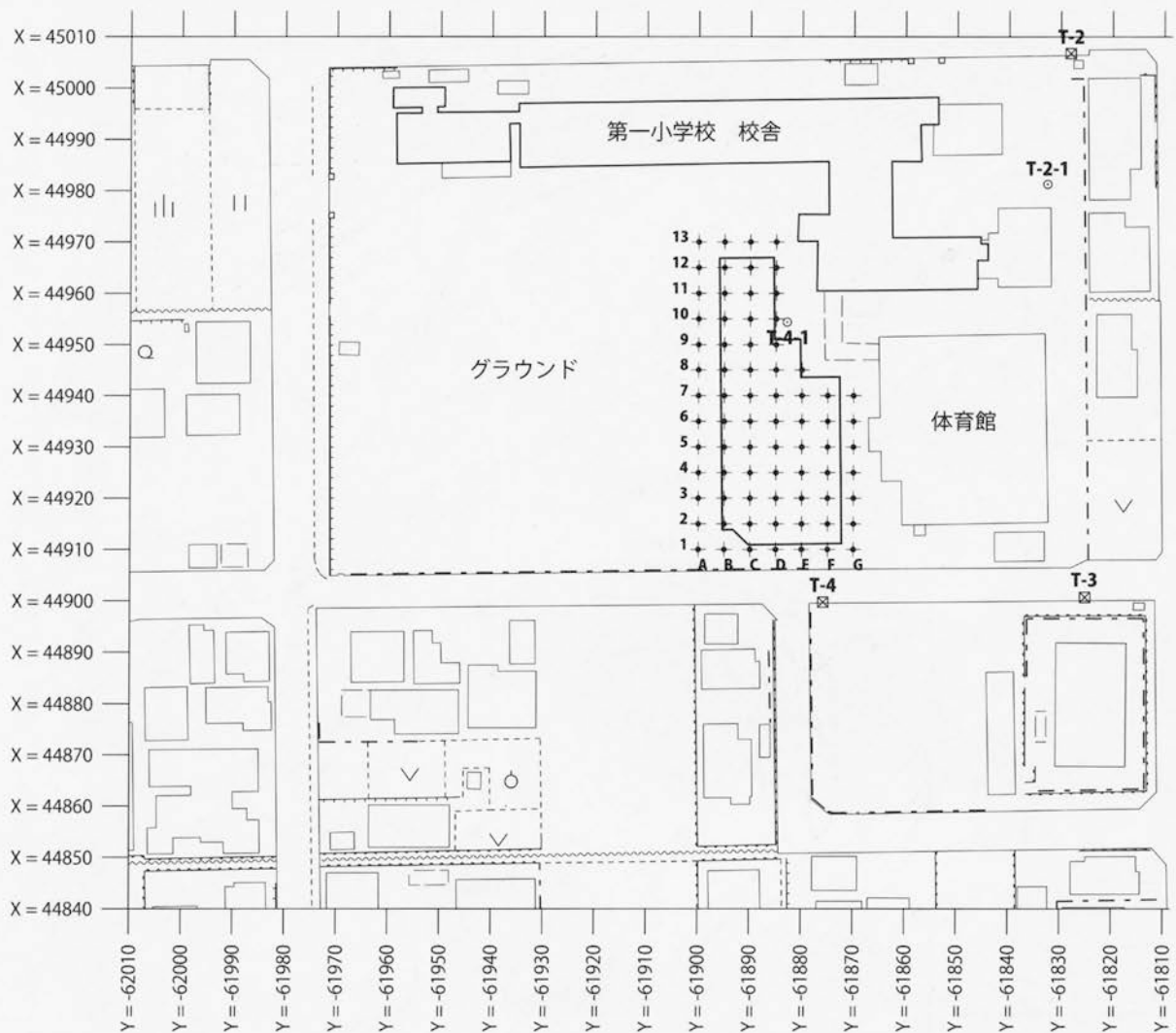


図6 調査区域グリッド配置図



など、作業環境を整えてから、作業員による遺構確認面（地山面）までの掘削を実施した。

重機により掘削した旧耕作土の下から遺構確認面までの間には、暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土が堆積しており、人力によってその土を掘り下げた。その厚みは、深いところで20数cm、浅いところでは10cmにも満たないところもあった。掘り下げの際に出土した遺物はグリッドごとに回収した。

なお、この暗灰黄色粘土については、遺物包含層というよりも、旧耕作土の下のほうの土と捉えたほうが妥当ではないかと思われる。今回の調査で確認された遺構、つまり、この暗灰黄色粘土の下に存在していた遺構のなかには、底の部分のみの残存といえるものもあり、これらは、過去の水田耕作や耕地整理等によって遺構の上部が壊されてしまっているものと思われる。よって、確認された遺構の直上にある暗灰黄色粘土も旧耕作土に含んで妥当と思われる。

暗灰黄色粘土を掘削したのは、随時、遺構確認を実施。必要に応じて、遺構を確認した段階での写真撮影を行った。

その後、遺構の掘り下げを実施。今回の調査で確認した遺構は溝とピット（掘立柱建物跡の柱穴を含む）のみであったが、溝については、任意に土層断面観察用のアゼを残して掘り下げた。とくに定量の遺物が出土したSD05においては、下層（SD05の土層断面図における2・3層）から出土する遺物を出土地点に残すようにして掘り下げた。なお、その他の溝における遺物の出土状況は、皆無ないしは土器片がごくわずかという結果であった。その後、土層断面の図面作成（ $S = 1/10$ ）と写真撮影、土層断面観察用のアゼの除去を行い、SD05では遺物出土状況の図面作成（ $S = 1/10$ ）と写真撮影、遺物の取り上げをも実施。完掘に至って、溝の完掘写真を撮影した。

ピットについては半裁し、覆土の観察をしてから完掘した。なお、今回の調査では掘立柱建物跡1棟を確認したが、それについてはエレベーション図（ $S = 1/20$ ）を作成した。

以上の作業を終えたのち、1次調査区・2次調査区のそれぞれにおいてラジコンヘリコプターによる空中写真撮影および空中写真測量を委託により実施した。本報告における遺構平面図および全体平面図は、その空中写真測量によって作成されたものに基づく。

## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 調査区域内における遺跡の概要

今回の調査で確認された遺構は、図7の全体図にあるように、掘立柱建物跡1棟と溝跡7本、その他にピット30数基程度で、遺構の密度は希薄な状況であった。また、ある程度の量の遺物を出土した遺構はSD05のみで、その他の遺構においては、皆無であるか、出土したとしてもごくわずかという結果であった。

こうした遺構の密度が希薄な状況は、当調査地が漆町遺跡内でも西南端の概ね縁辺部に位置することにもよるであろうが、当調査地における遺跡の遺存状態が良くないことが大きな要因の1つではないかと思われる。とくに今回の調査で確認されたSD04・06・07であるが、これら3本の溝跡は確認面からの深さが5～10cm程度の浅いものであり、過去の耕地整理などによって遺構の上部が壊され、底部のみが残存したものである。そして、底部まで壊された遺構は、当然のことながら発掘調査で確認されないこととなるのであるが、そうした遺構が今回の調査地のなかにいくつかあったのではないかと推測される。

一方、出土遺物について見ると、大部分は遺構外遺物で、遺構確認面（地山面）の上に堆積していた暗灰黄色粘土層からの出土遺物である。遺物箱（60×40×15cm）にして5～6箱分あった。この暗灰黄色粘土層は、遺物包含層というよりも、むしろ旧耕作土の下のほうの層といえるもので、過去の耕地整理などによって遺構を破壊している層と考えられる。その出土遺物を見ると、弥生時代末（月影式期）から中世、さらには近世の遺物が出土している。とくに古代の須恵器が最も多く、大半を占めており、印象としてはあるが、遺構外遺物の概ね4分の3程度を占めている。

さて次に、遺構からの出土遺物をみると、ある程度の量の遺物を出土したのはSD05のみで、SD05以外では、SD03とSD04から土器の小片が数点出土した程度。その他においては出土遺物は皆無であった。SD05については、破片にして数十点ほどの土器片が出土しており、その出土土器から白江式期ごろ（古墳時代初頭ごろ）に位置づけられると思われる。

あと、今回の調査で遺構確認面となった地山面の状況についてであるが、基本的には灰色（5Y6/1）粘土が検出された面を遺構確認面（地山面）として調査を行った。しかし、1・2・3の各グリッドと4・5・6-D・Eグリッドのところどころで灰色（5Y6/1）砂が見られ、SD03・05・07はこの灰色砂を切るかたちで検出された。よって、その灰色砂が検出された面も遺構確認面（地山面）と判断して調査を行った。



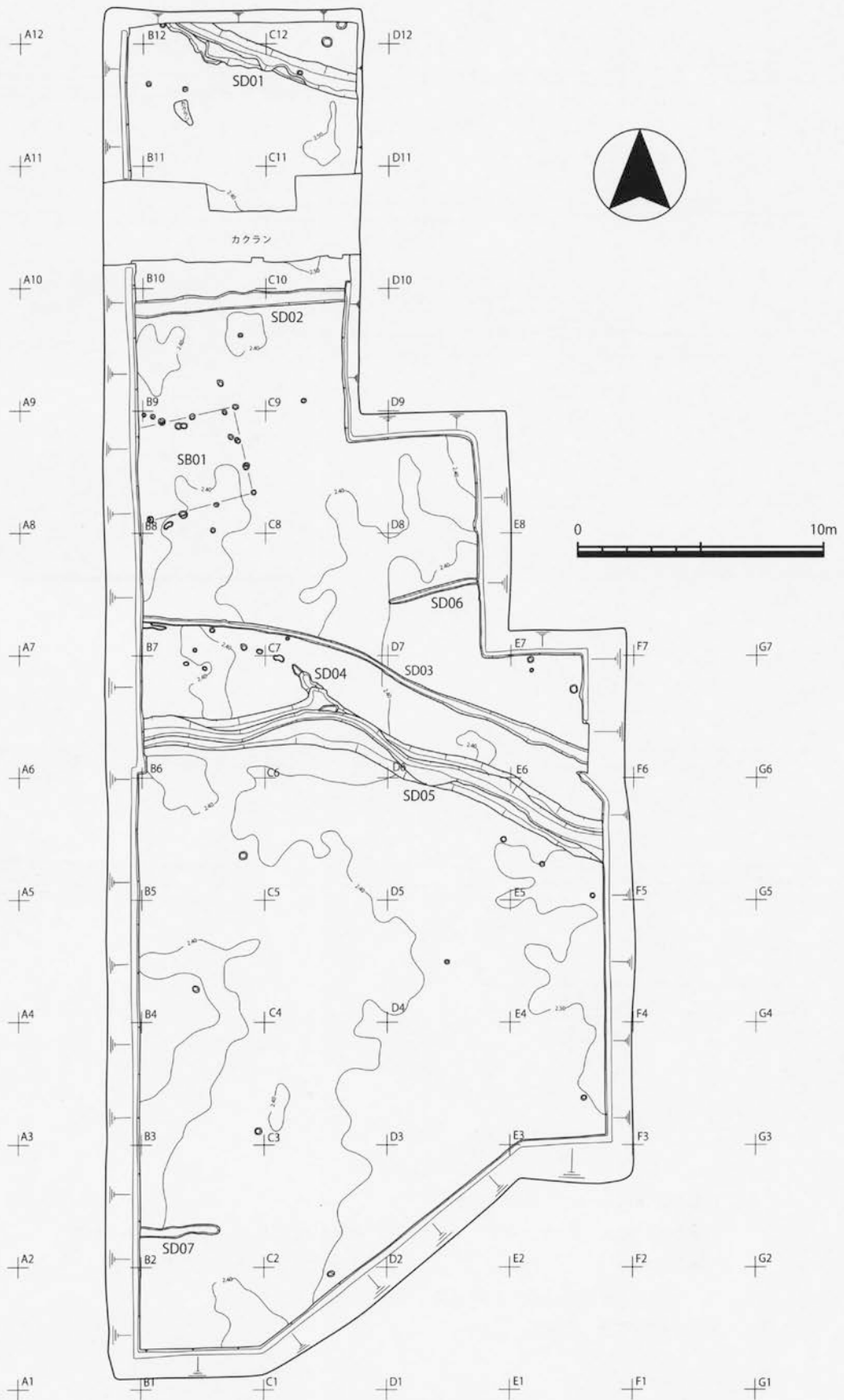
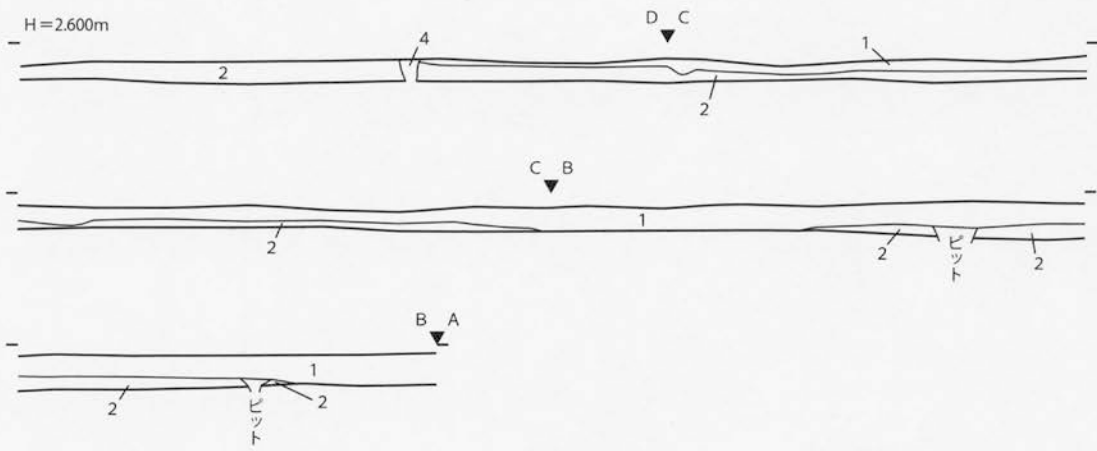
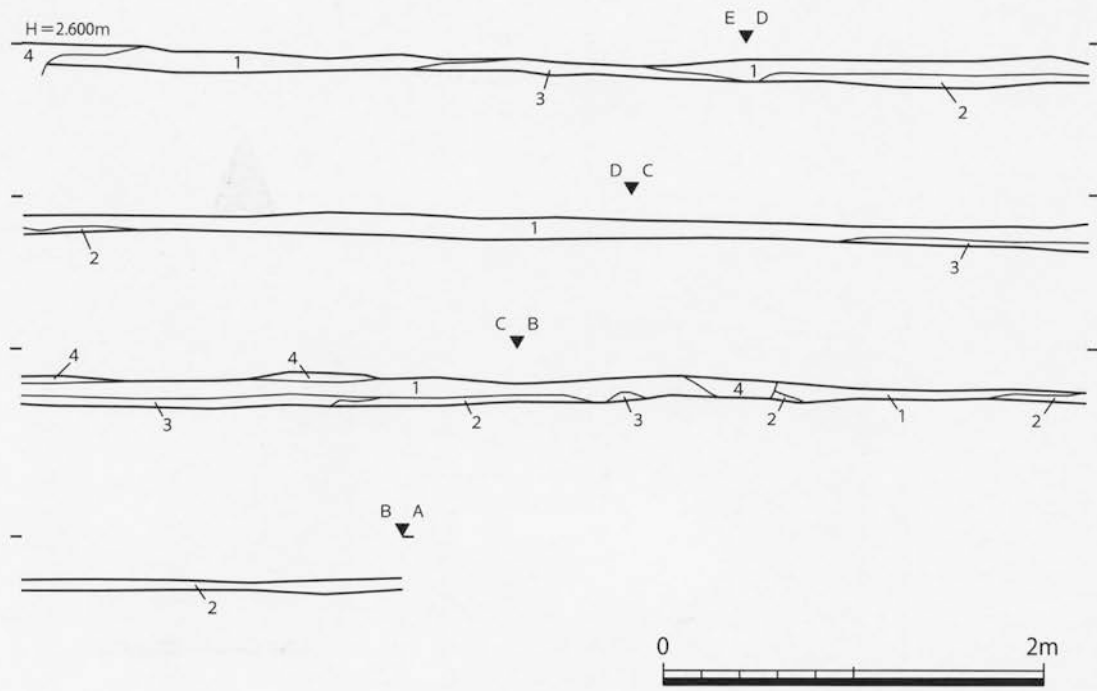


図7 調査区域 全体平面図 (S=1/250)



- 1層：暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土。
- 2層：地山粘土（灰色（5Y6/1）粘土）に1層土少量混じる（地山との漸移的層）。
- 3層：地山砂（灰色（5Y6/1）砂）に1層土少量混じる（地山との漸移的層）。
- なお、2層と3層との境はあいまい。
- 4層：旧耕作土。黒褐色（2.5Y3/1）粘土。

図8 3・4グリッド間（上段）、7・8グリッド間（下段） 調査区土層断面図（S = 1/40）

## 第2節 遺構

### SB01 (図9)

B-8Grに位置。3間以上×3間の建物跡で、柱穴9本を確認した。主軸は北(座標北)から東へ約20°振る。なお、柱穴の並びに少しズレがある。柱穴の覆土は、黒褐色(10YR3/1)粘土に地山粘土が多く混じる土で、P2・P8・P9の下層においては、黒褐色粘土よりもやや明るめの黄灰色(2.5Y4/1)を呈した、しまりの弱い粘土も堆積していた。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

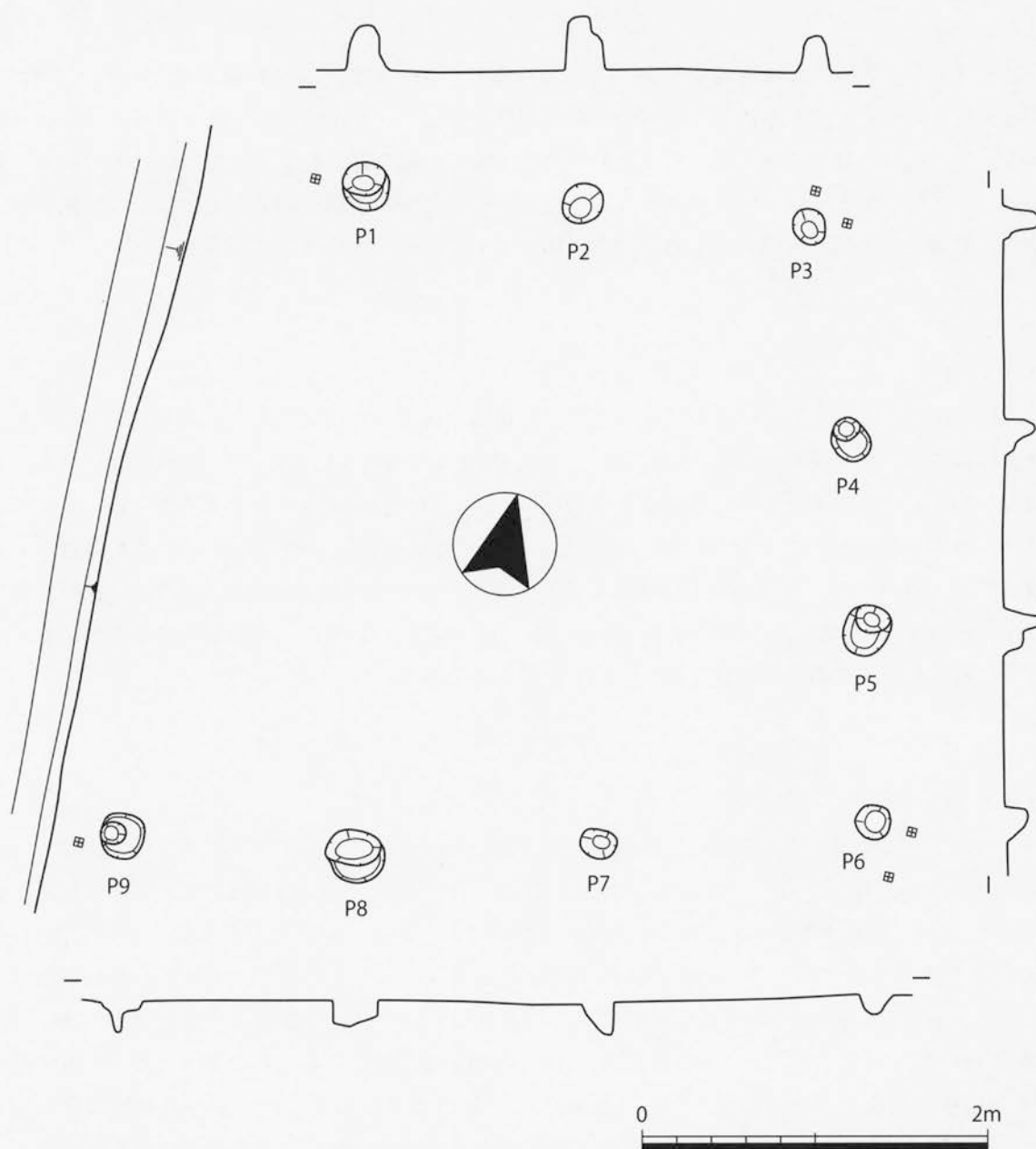


図9 SB01 平面図・エレベーション図 (S=1/40) (H=2.500m)

#### SD01 (図10)

B・C - 11・12Gr に位置。東南東から西北西方向へ流れるミゾである。幅は狭いところで約 80cm、広いところで約 150cmを測り、深さは確認面から最大で約 25cmある。覆土については、上から、黒褐色 (7.5YR3/2) 粘土 (1層)、褐灰色 (10YR4/1) 粘土 (3層)、褐灰色 (10YR4/1) 粘土に砂がやや多く混じる土 (5層) の概ね 3つの層に分けられる。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。なお、第3章第1節 (本書7ページ) でも触れたが、東隣にある昭和60年の調査区で検出された4号溝が、このSD01につながるものと思われる。当時の調査では、4号溝からの出土遺物はなかったとのことである。

#### SD02 (図11)

B・C - 9Gr に位置。概ね東西方向に流れる。幅は 60～70cm程度、深さは確認面から最大で約 20cmある。覆土については、地山粘土よりやや暗度が強い褐灰色 (10YR5/1) の粘土をメインとした土である。他の遺構とは全く違う覆土で、なおかつ地山粘土と似た覆土をしていたため、地山粘土の変色か何かではないかと思われ、遺構とするには疑問が残ったが、遺構確認でミゾとしての輪郭が見えたので、遺構として掘り上げた。なお、出土遺物はなく、このミゾの時期は不明である。

#### SD03 (図12)

B～E - 6・7Gr に位置。緩いカーブを描きながら概ね東南東から西北西方向に流れ、B - 7Grあたりでは概ね東西方向に流れている。幅は狭いところで 25cm程度、広いところで 70cm程度、深さは確認面より 10～15cm程度である。覆土は、黒褐色 (7.5YR3/1) 粘土をメインとするが、E - 6Grあたりでは、地山が砂であるためか、砂気の強い覆土となっている。出土遺物については土師器片1点と須恵器片1点のみで、遺構の時期は不明である。なお、このミゾは、東隣にある昭和60年の調査区で検出された11号溝につながるものと思われる。11号溝については、時期不明であるが、当時の調査で検出された方形周溝状遺構を切っているとのことである。

#### SD04 (図13)

B・C - 6・7Gr に位置する。遺構の上部が壊され、底の部分のみが点在して残っていたものである。東南東から西北西方向に流れ、東南東の端ではSD05と、西北西の端ではSD03と合流する。覆土は黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土をメインとする。SD03・SD05それぞれとの切り合い関係についてであるが、SD03との関係については、今回の調査区内では重なる部分がほとんどなく、切り合い関係を確認するに至らなかった。SD05との関係については、切り合っているという状況は見出されず、SD04は、SD05と同時期 (白江式期ごろ)、もしくは、SD04の覆土がSD05における2層土 (第16図にあるSD05土層断面図を参照) とも考えられることから、SD05よりやや新しい時期の遺構ではないかと思われる。出土遺物については、SD05との合流部付近で有段口縁甕の口縁部と思われる細片が2点出土した程度であった (これらの破片については、極めて磨滅が著しい細片のため図化できなかった。なお、2点は同一個体と思われるもので、口縁部が外傾し、口縁部から頸部に至る段が極めて緩やかなタイプのものである)。

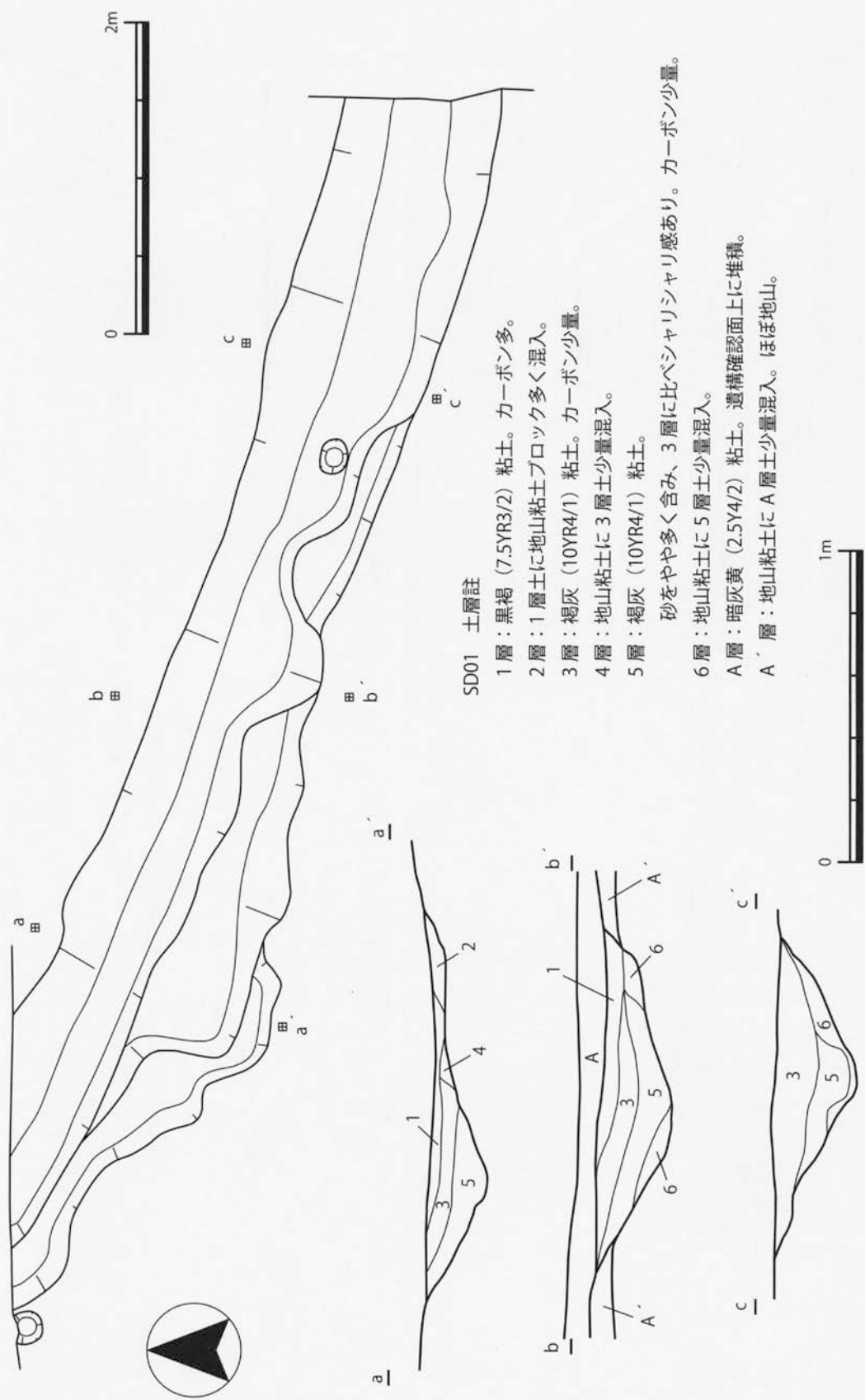
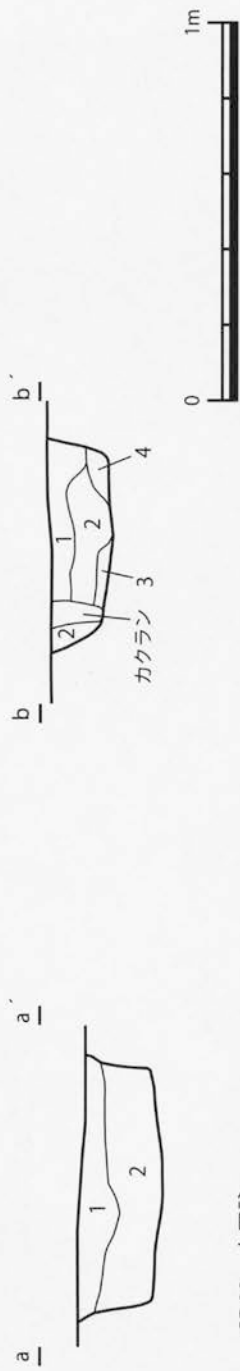
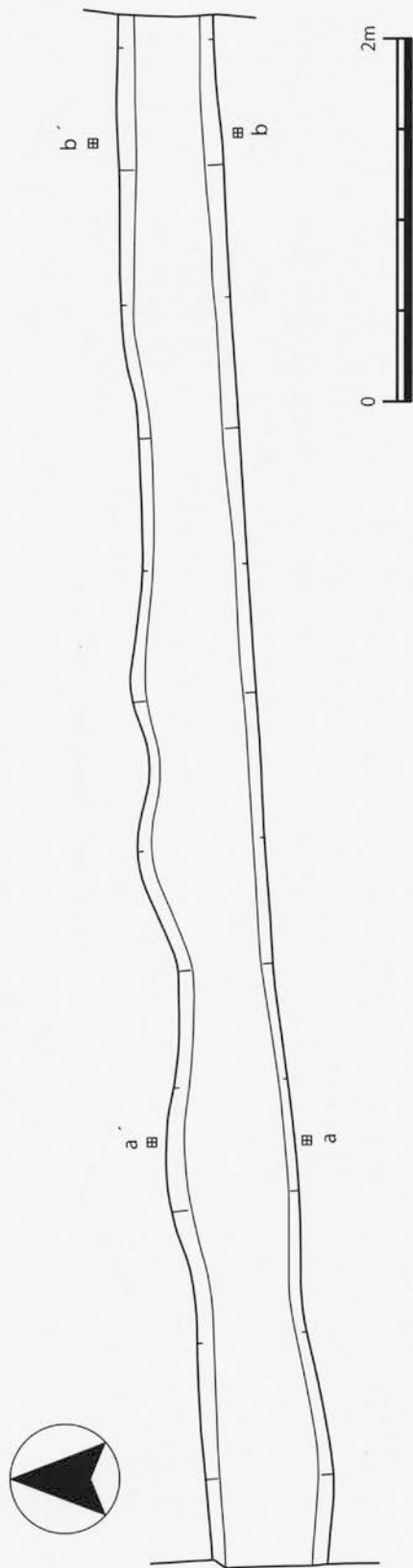


図 10 SD01 平面図 (S=1/40) および土層断面図 (S=1/20) (H=2.500m)



SD02 土層註

- 1層：褐灰 (10YR5/1) 粘土 (地山よりやや暗度強)。黒い吹き出しが多量に混じる。
- 2層：褐灰 (10YR5/1) 粘土 (地山よりやや暗土強)。
- 3層：地山粘土に2層土少量混じる (地山漸移層)。
- 4層：2層土に灰オリーブ (5Y4/2) 粘土が多量混じる。ややわらかく、腐植土っぽい感じがする。

図 11 SD02 平面図 (S=1/40) および土層断面図 (S=1/20) (H=2.500m)



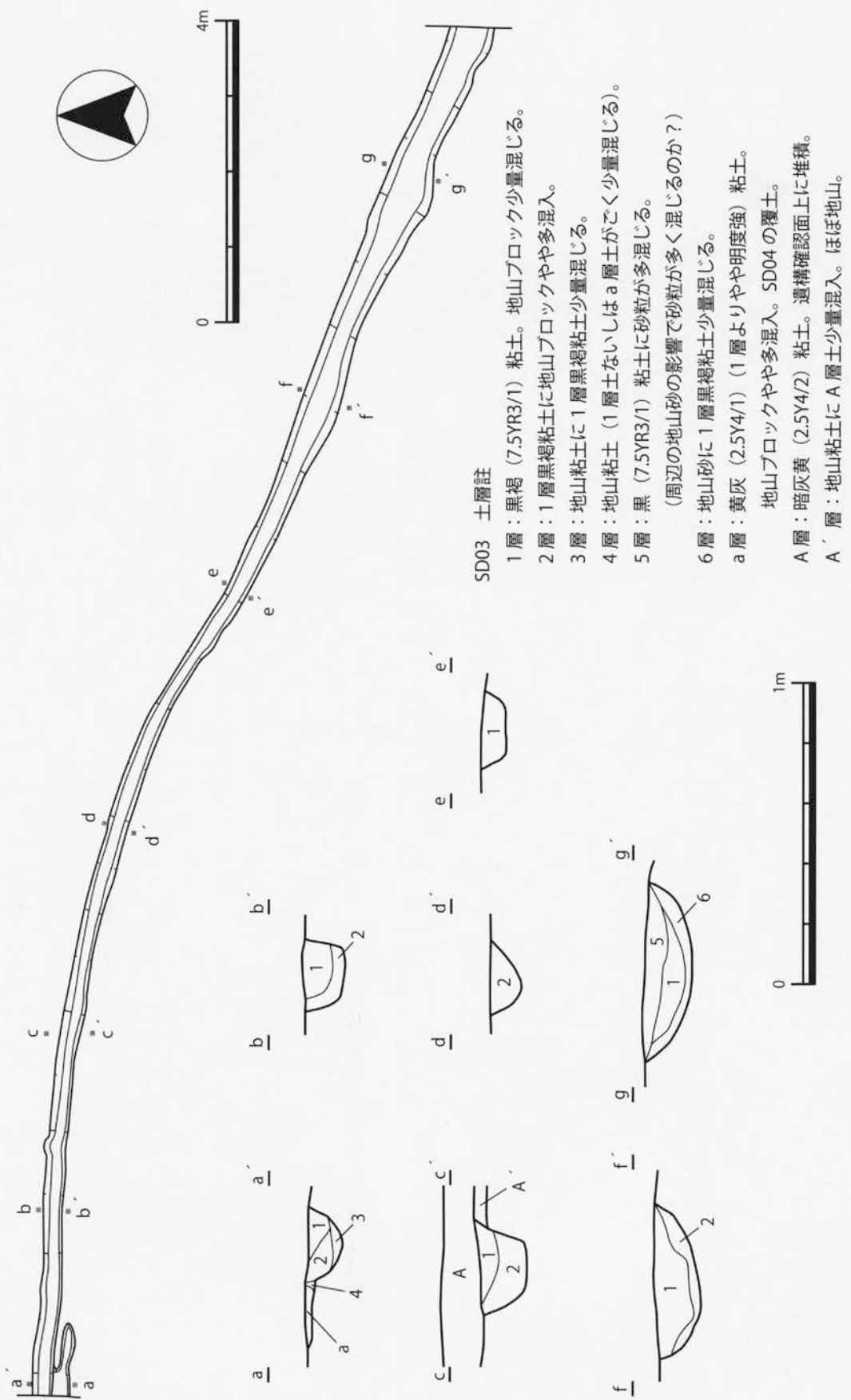
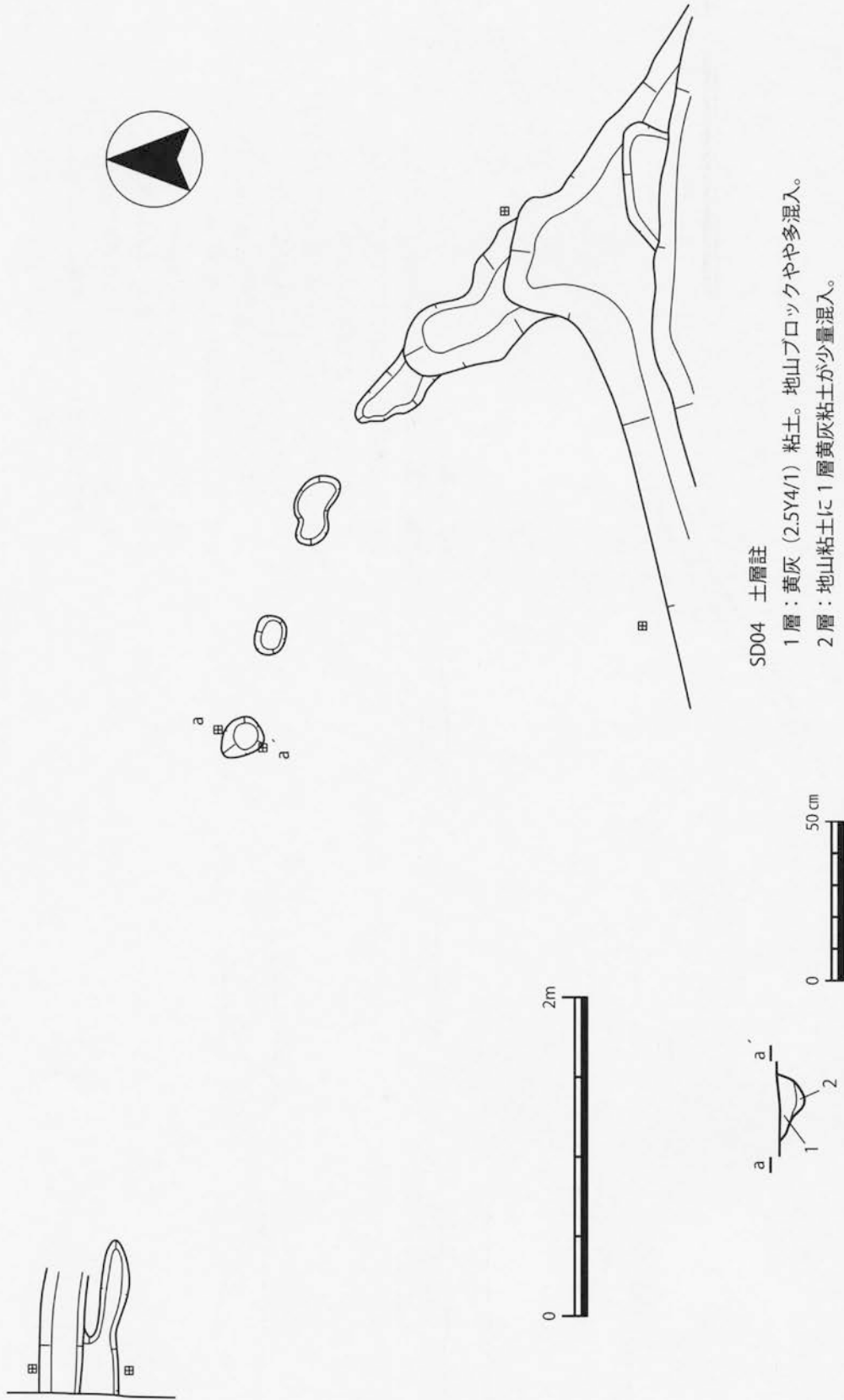


図12 SD03 平面図 (S=1/80) および土層断面図 (S=1/20) (H=2.500m)



SD04 土層註

1層：黄灰（2.5Y4/1）粘土。地山ブロックやや多混入。

2層：地山粘土に1層黄灰粘土が少量混入。

図13 SD04 平面図 (S=1/40) および土層断面図 (S=1/20) (H=2.400m)

#### SD05 (図14～16)

B～E－5・6Grに位置する。D・E－5・6Grでは東南東から西北西方向に流れ、それより西では少し蛇行して概ね東西方向に流れる。幅は120～160cm程度、深さは確認面より最大で50cm程度ある。覆土は、上から、褐灰色(7.5Y4/1)粘土(1層)、黄灰色(2.5Y4/1)粘土(2層)、黄灰色(2.5Y4/1)粘土に砂粒が多く含まれた土(3層)、黄灰色(2.5Y4/1)粘土に地山粘土ブロックが多く混入した土(4層)の概ね4つの層に分けられる。出土遺物については、数十点ほどの土器片が出土しており、図15の遺物出土状況図は2層・3層における出土状況を示したものである。なお、2層・3層では遺物を出土位置に極力残すようにして掘り下げて出土状況図の作成を行ったが、1層では出土状況を図化せずに遺物を取り上げ、4層については出土遺物はなかった。遺構の時期については、月影式期ごろと思われる土器片もいくつか出土したが、出土土器のほとんどは白江式期ごろと判断され、概ねその時期に位置づけられると思われる。

#### SD06 (図17)

D－7Grに位置。東北東から西南西方向に流れるミゾで、D－7Grの東端から4mほどの長さで途切れてしまっている。幅は30cm程度、深さは確認面から最大で10cm程度である。遺構の上部が壊され、下部しか残っていないミゾといえる。覆土は、黒褐色(7.5YR3/1)粘土に地山粘土ブロックがやや多く混入した土である。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

#### SD07 (図18)

B－2Grに位置。概ね東西方向に流れ、B－2Grの西端から3mほどの長さで途切れている。幅は30～50cm程度、深さは確認面から最大で5cm程度である。遺構の上部が壊され、下部しか残っていないものといえる。覆土は、黒褐色(10YR3/1)粘土に砂粒が多く混入している土をメインとしている(砂粒が多く混入しているのは、SD07が検出されたところが灰色砂の地山であることによると思われる)。出土土器はなく、遺構の時期は不明である。

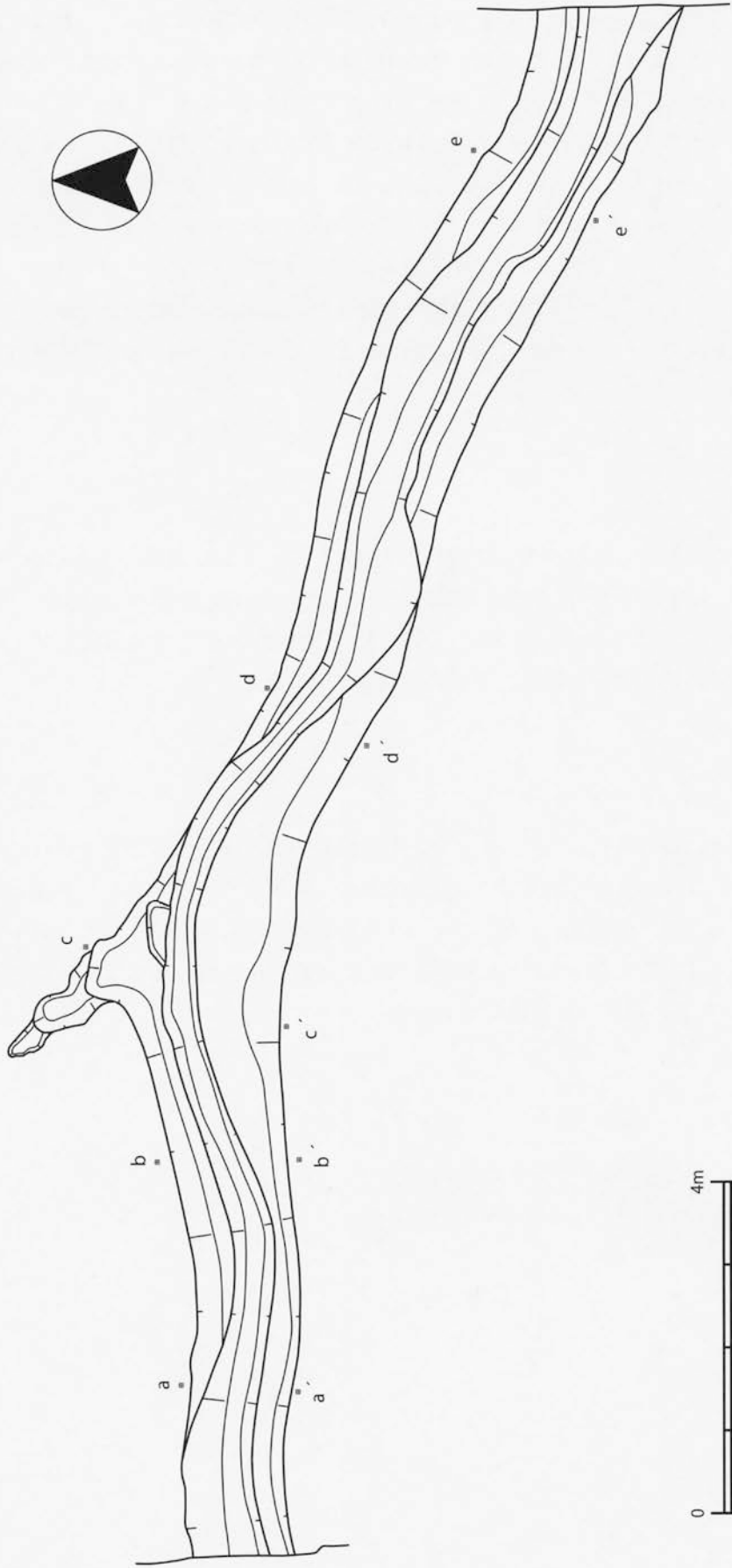
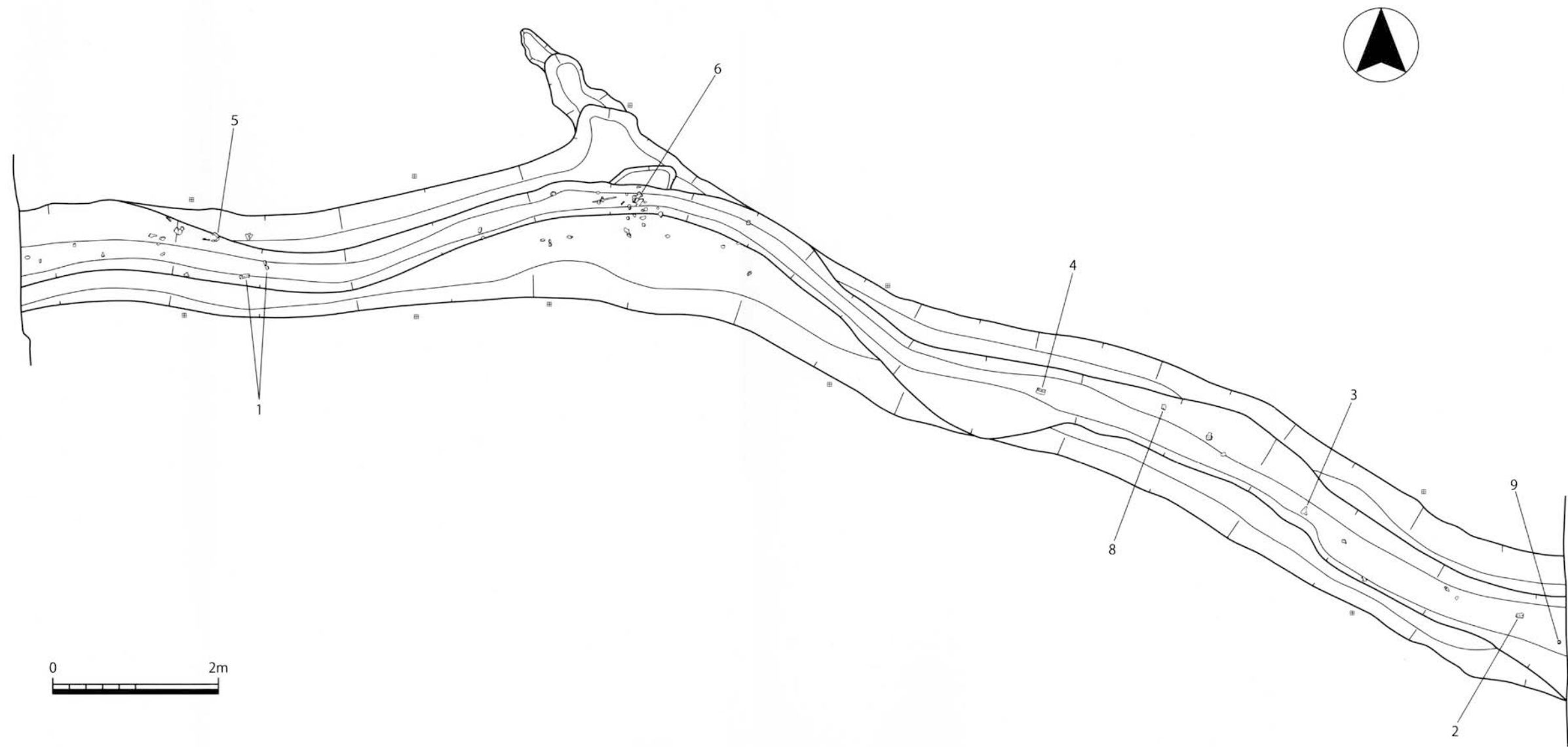


图 14 SD05 平面图 (S=1/80)



遺物の番号は図 19 の土器番号。

図 15 SD05 遺物出土状況図 (S=1/60)





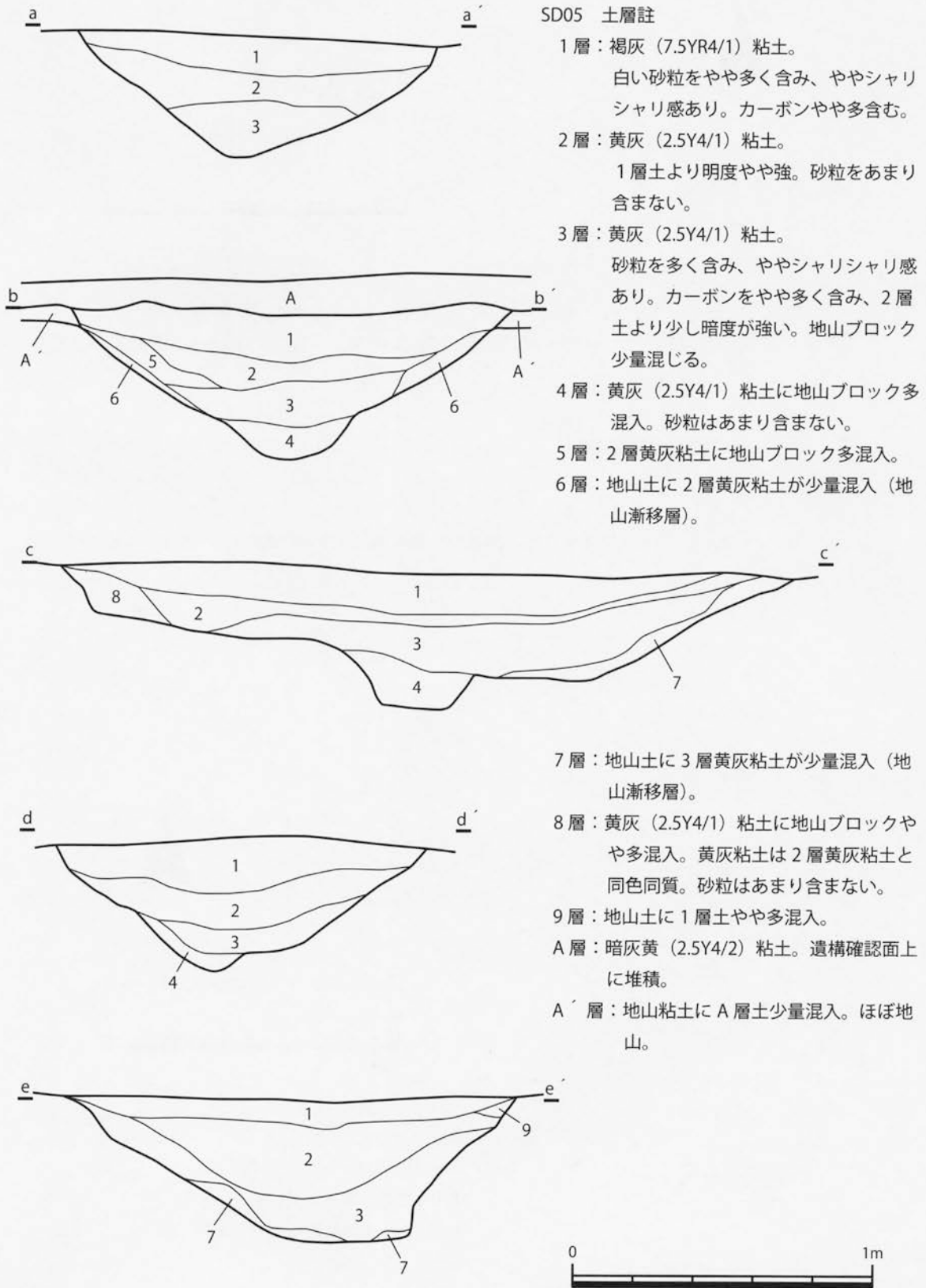


図 16 SD05 土層断面図 (S=1/20) (H=2.400m)

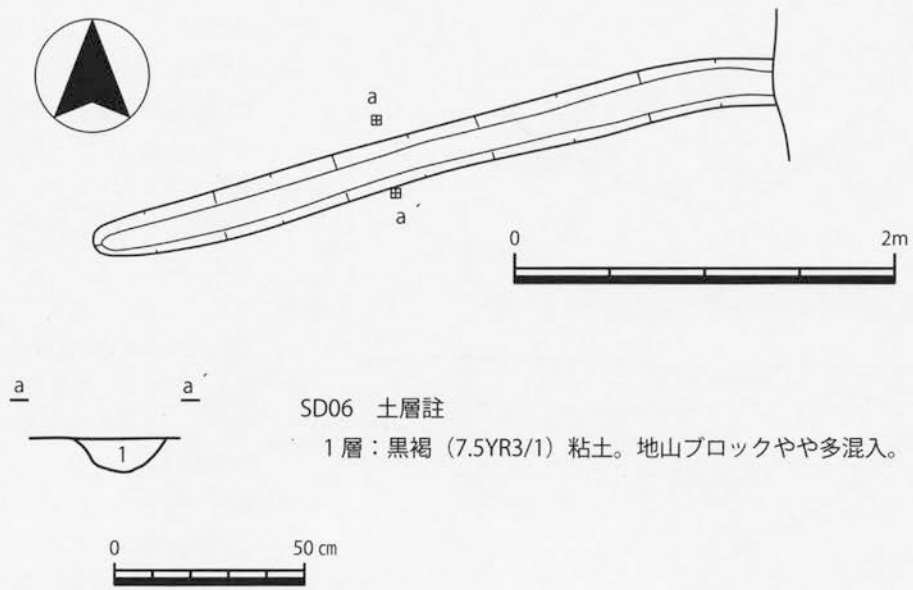


図 17 SD06 平面図 (S=1/40) および土層断面図 (S=1/20) (H=2.500m)

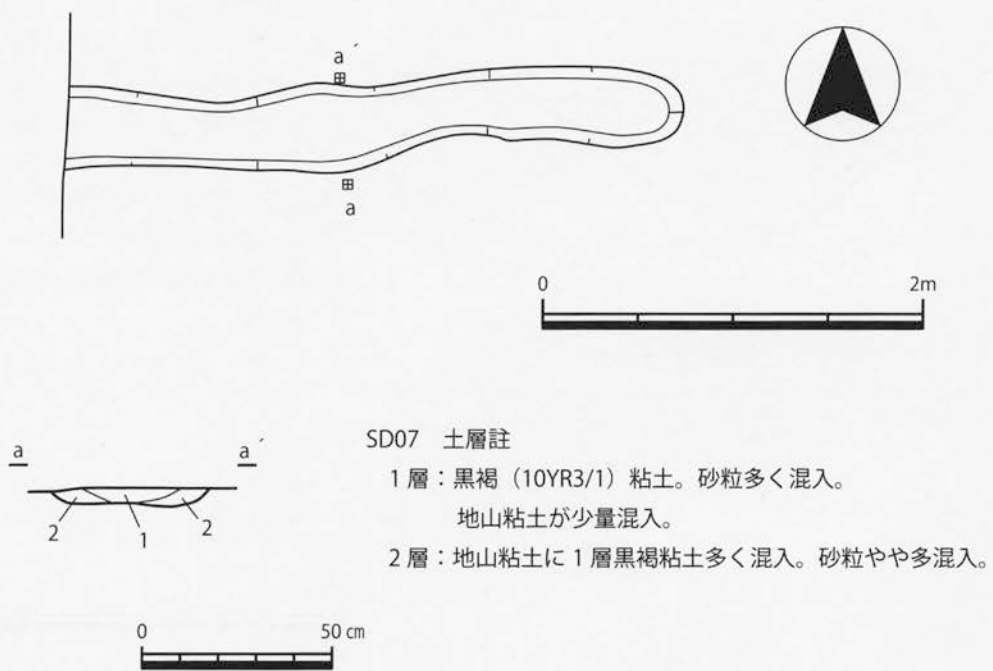


図 18 SD07 平面図 (S=1/40) および土層断面図 (S=1/20) (H=2.400m)

### 第3節 遺物

#### SD05出土遺物（図19および表2）

SD05からは、破片にして数十点ほどの土器片が出土した。SD05の覆土については、最上層で褐色粘土の1層、黄灰色粘土の2層、黄灰色粘土に砂粒が多く含まれた3層、黄灰色粘土に地山粘土ブロックが多く混入した4層に概ね分けられたが、遺物は1～3層で出土しており、4層からの出土遺物はなかった。出土した土器の時期について見ると、月影式期ごろと思われる土器片もいくつか含まれていたが、ほとんどは白江式期に位置づけられる。出土土器のうち図化できた9点の実測図を図19に掲載したが、各土器の出土層位、調整、残存等については、表2の観察表に記載してある。

#### 遺構外出土遺物（図20～24および表3）

今回の調査で出土した遺物のほとんどは遺構外遺物で、遺物箱（60×40×15cm）にして5～6箱分が出土した。これらの遺物は、表土除去で掘削した旧耕作土の下から遺構確認面（地山面）に至るまでに堆積していた暗灰黄色粘土から出土したものである。なお、この暗灰黄色粘土は、遺物包含層ではなく、旧耕作土の下のほうの土と判断される。遺構外遺物の時期について見ると、弥生時代末（月影式期）から中世の遺物が見られ、さらには、近世の遺物も出土した（江戸時代末の銅銭「文久永宝」が出土している）。とくに古代の須恵器が最も多く出土しており、遺構外遺物の概ね4分の3程度を占めている。また、古代の遺物においては、転用硯（図21－23・26）、墨書土器（図22－43「美」）、瓦（図23－69）といった遺跡の性格を窺わせるようなものも出土している。図20～図24において、図化できた遺物の実測図を掲載したが、各遺物の詳細については表3の観察表に記載した。

#### 注）表3「遺構外出土遺物観察表」における編年標記について

表3「遺構外出土遺物観察表」に掲げてある時期（編年標記）についてであるが、6世紀～古代・中世の須恵器・土師器については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸（田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』）による標記を用いている。ただし、非ロクロの中世土師器皿については藤田邦雄氏による編年標記（藤田邦雄1997「中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸』）、加賀焼については宮下幸夫氏ほかによる編年標記（宮下幸夫ほか1990「中世加賀の窯業研究—加賀焼の現状と課題—」『石川考古学研究会々誌第33号』）を用いている。また、「漆町編年」とあるのは田嶋明人氏による漆町編年（田嶋明人1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』）をさす。

#### 注）遺物番号43の墨書土器について

遺物番号43の墨書土器については、破片のため文字が上半分しかないのであるが、昭和56年に実施された漆町遺跡白江・ネンブツドウ地区での調査（小松市教育委員会実施。未報告）において「美」が書かれた墨書土器が出土しており、当該土器に書かれた文字も「美」であると思われる。

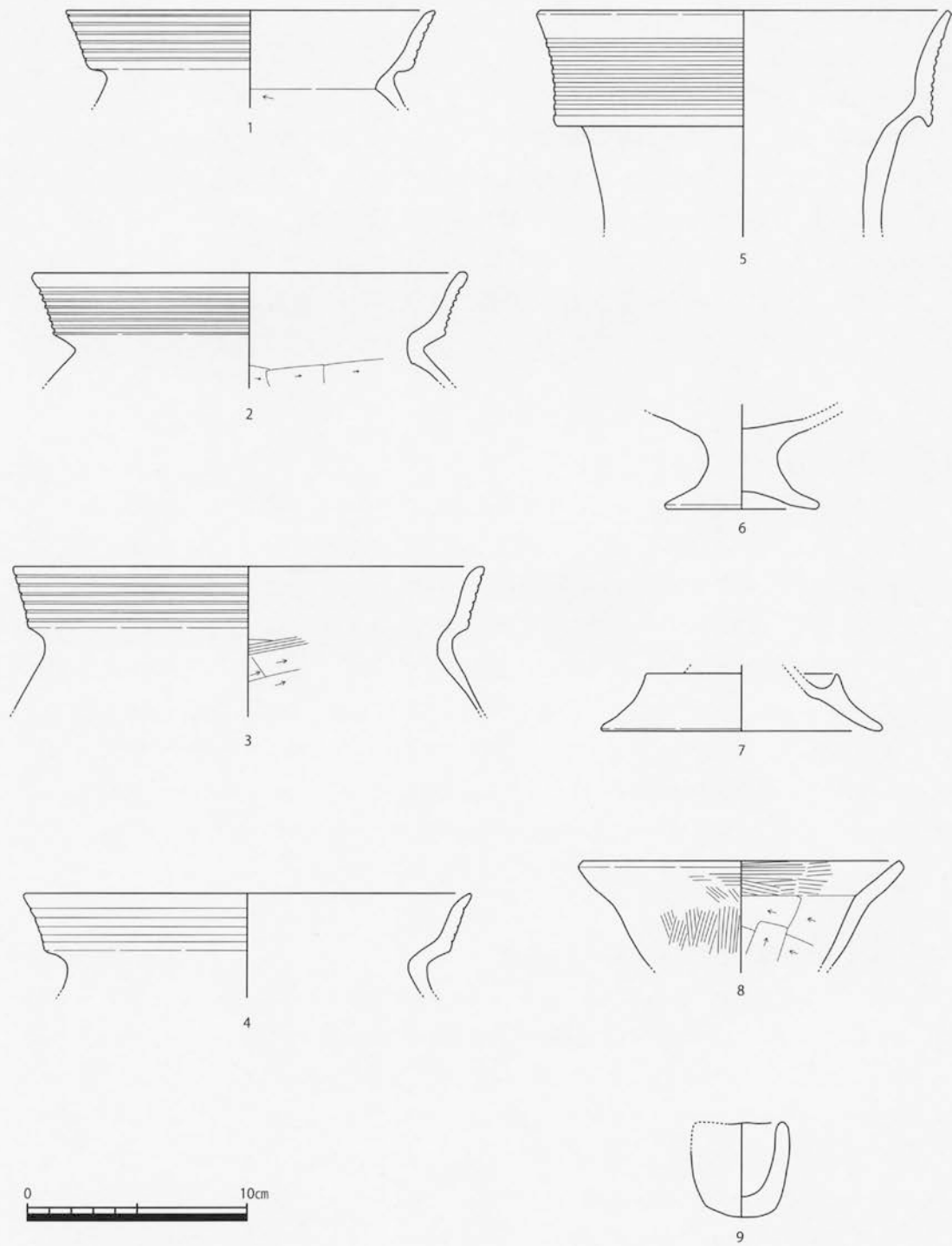


图 19 SD05 出土土器 (S=1/3)

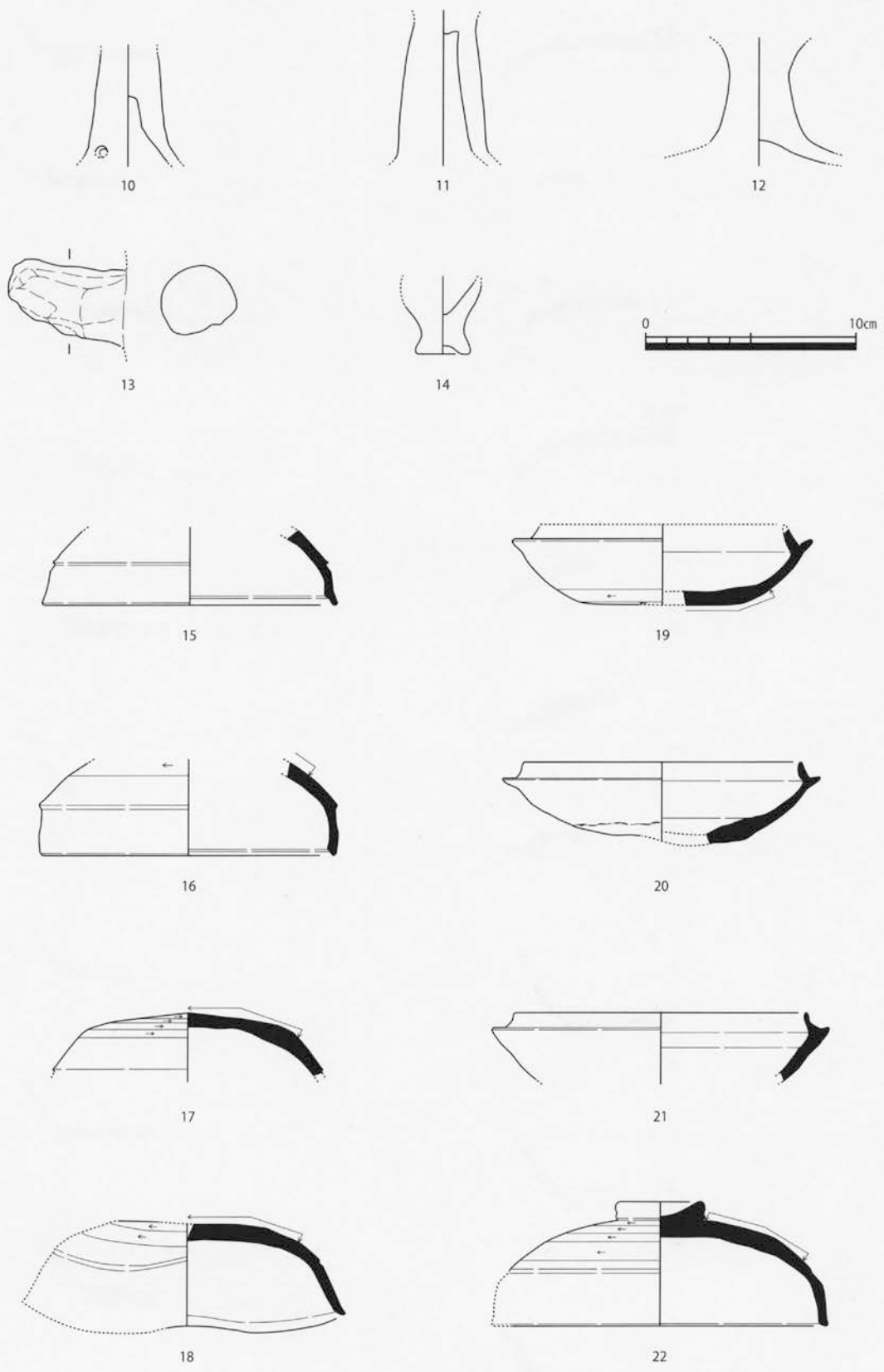


図 20 遺構外 出土土器（その1）（S=1/3）

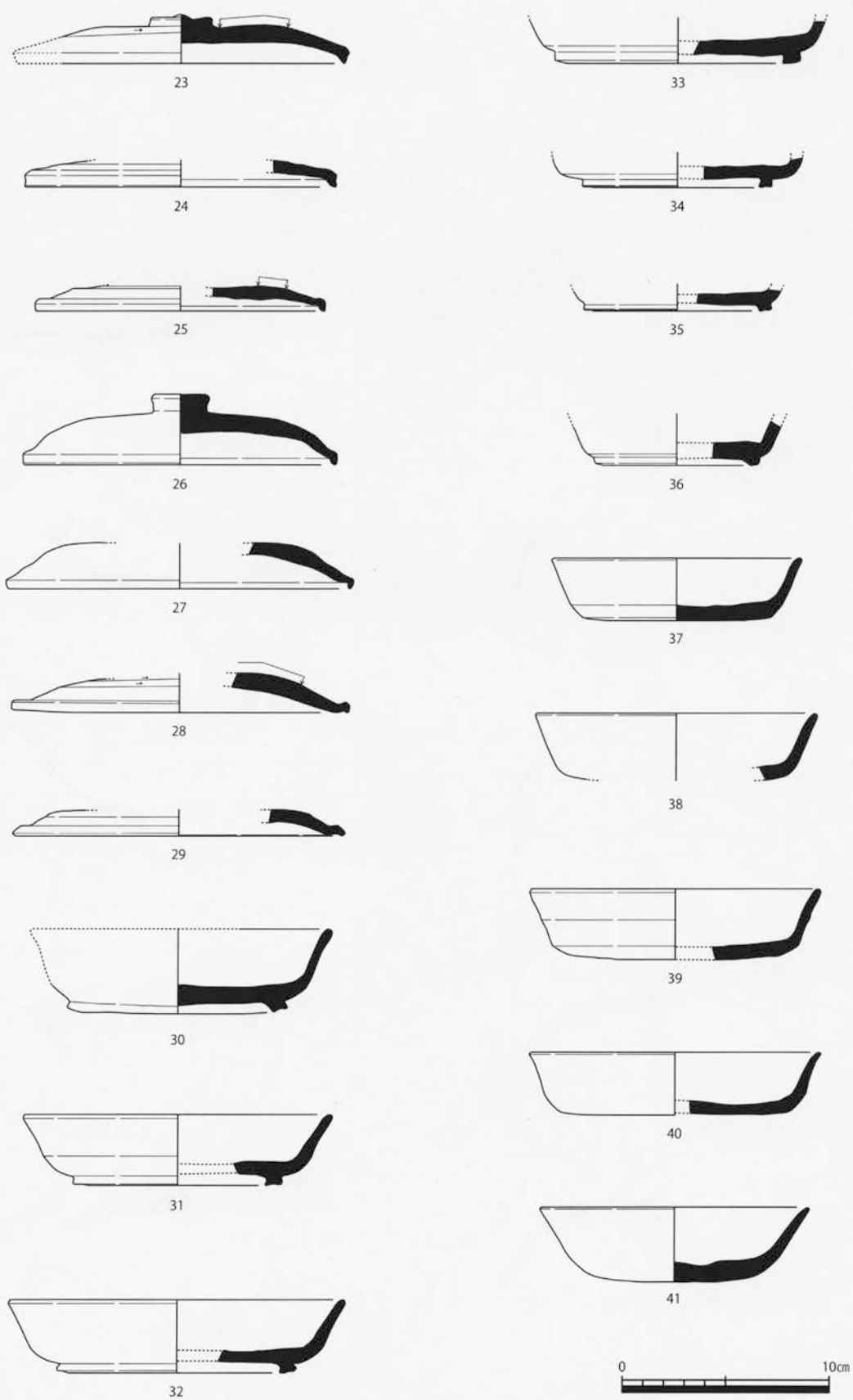


図 21 遺構外 出土土器 (その2) (S=1/3)

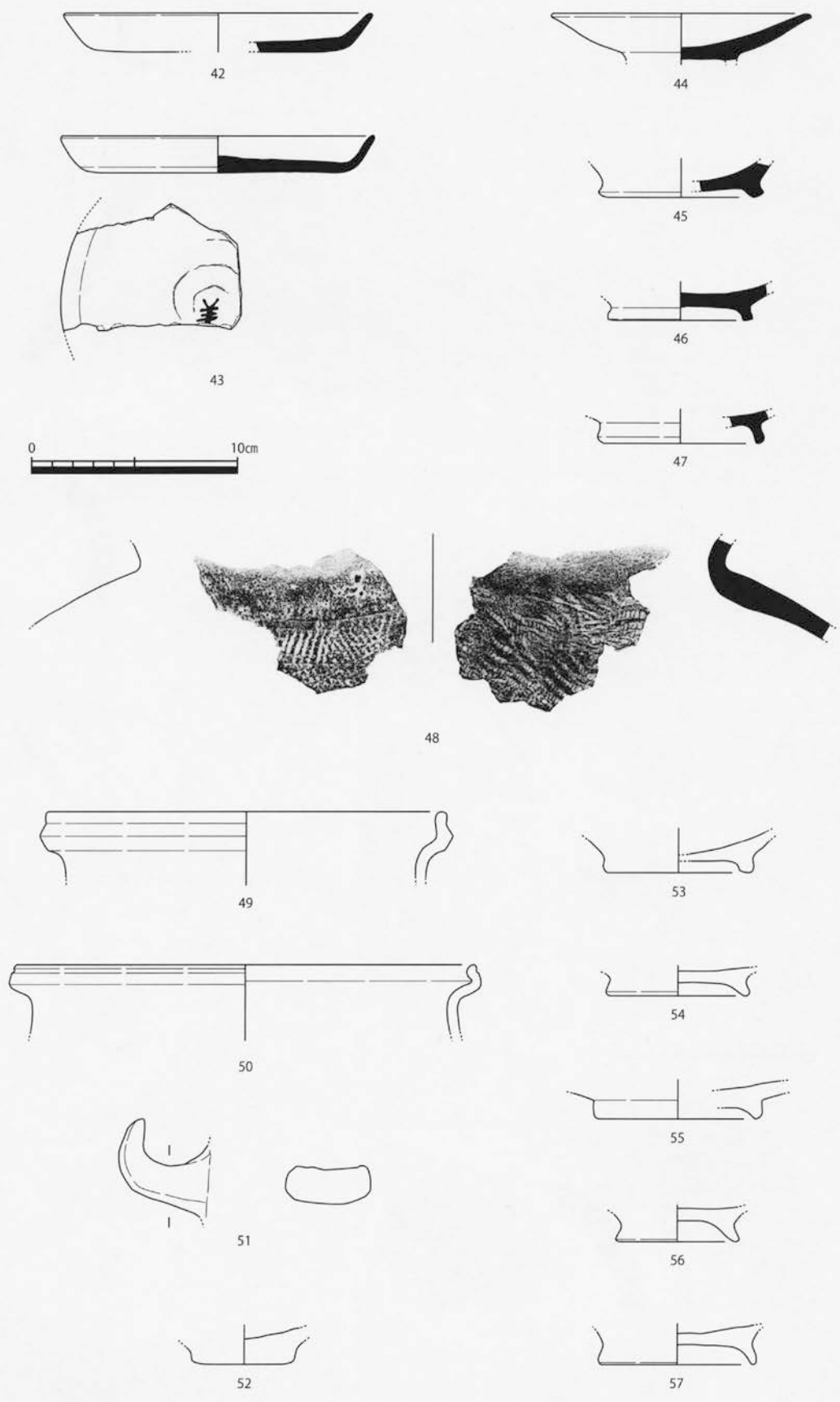


図22 遺構外 出土土器（その3）（S=1/3）

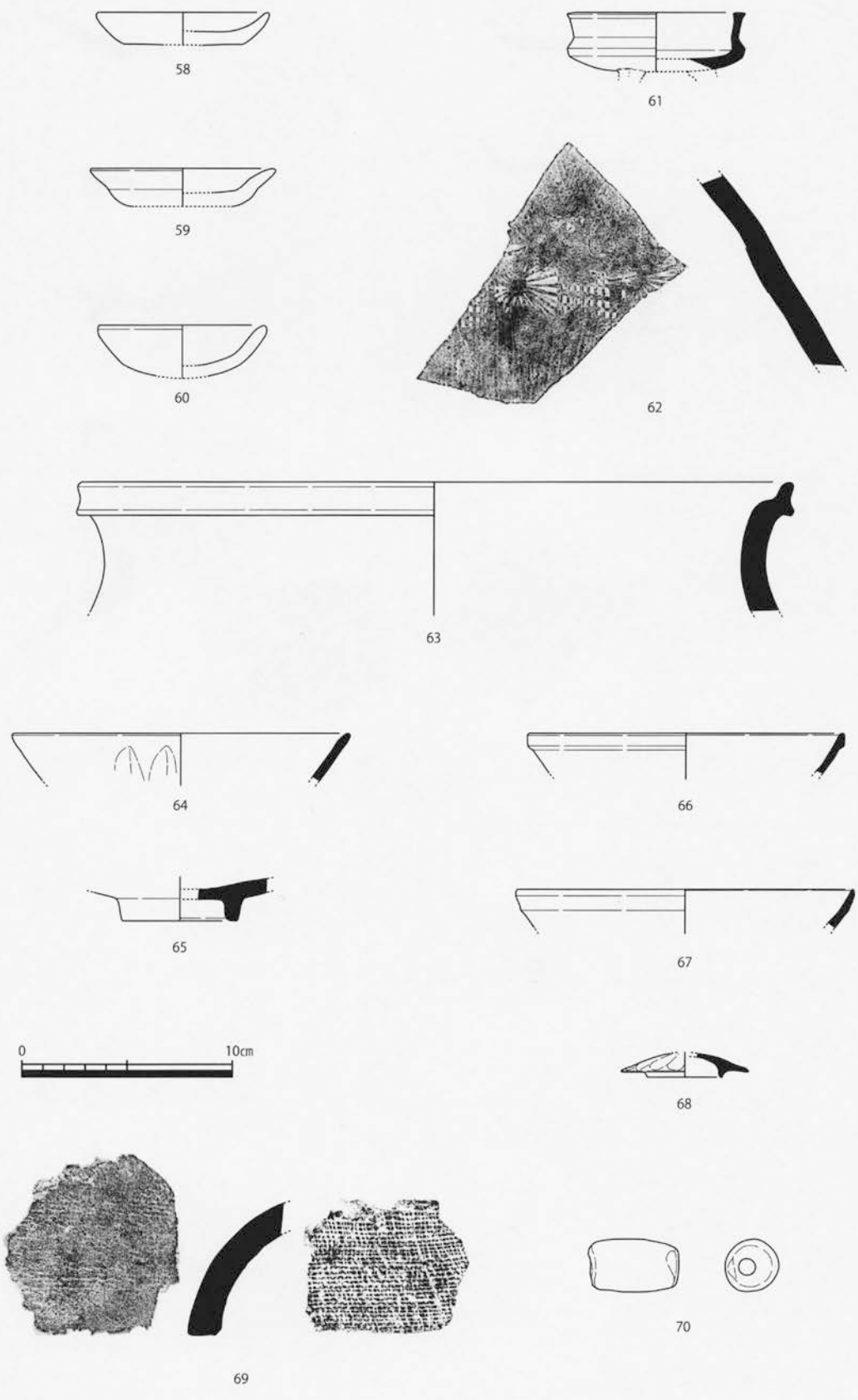


图 23 遺構外 出土土器・中世陶器・青磁・白磁・瓦・土錘 (S=1/3)



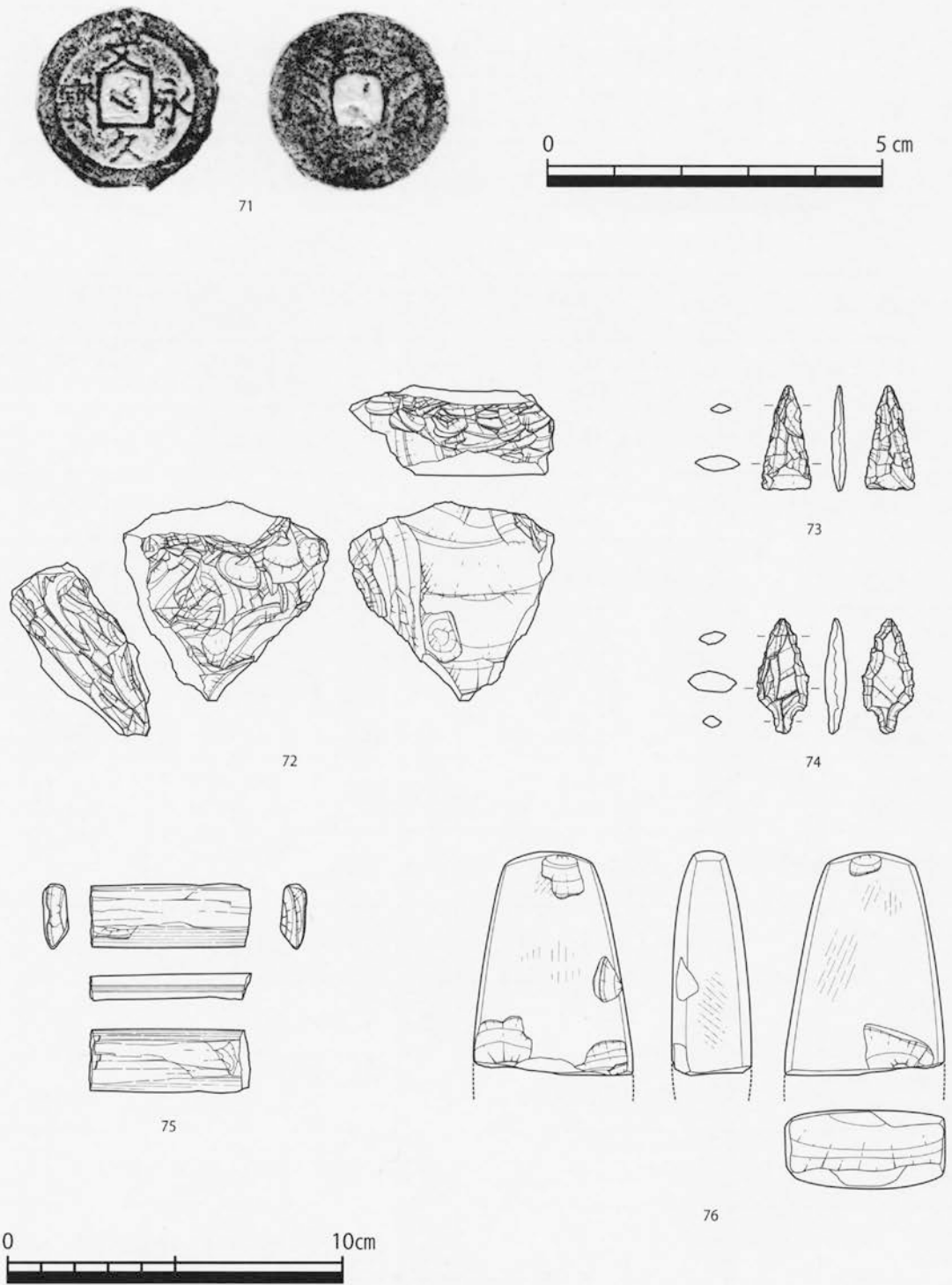


図 24 遺構外 出土銭 (S=1/1)・出土石器 (S=1/2)

表2 SD05 出土土器 観察表

	器種等	出土層	法量 (cm)	調整等	残存	備考
1	甕 口縁部	3層	口径 16.8	外面：磨滅 内面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り	口縁部 1/2	外面スス多付着
2	甕 口縁部	3層	口径 19.6	外面：磨滅 内面：体部ヘラ削り・口縁部磨滅	口縁端部 1/8 口縁部下端部 1/4	
3	甕 口縁部	3層	口径 21.2	外面：磨滅 内面：口縁ヨコナデ・頸部ハケ・体部ヘラ削り	口縁端部 1/16 口縁部下端部 1/4	
4	甕 口縁部	2層	口径 20.2	内外面とも磨滅	口縁部 3/8	
5	壺 口縁部	2・3層	口径 18.4	外面：頸部はタテ方向ハケ調整後ヨコナデ 内面：磨滅	口縁端部 1/16 口縁部下端部 3/8	口縁部端部の擬凹線は凹み浅く不明瞭
6	台付壺 脚部	3層下底	底径 6.8	外面：磨滅 内面：底部ナデ・体部磨滅	底部 1/2 脚部ほぼ完存	同一個体の体部片あるが接合できず
7	器台 脚部	不明	底径 10.6	内外面とも磨滅	底部 1/3	
8	鉢 口縁部	3層	口径 14.4	外面：ハケ 内面：口縁部ハケ・体部ヘラ削り	口縁部 3/8	体部外面スス多付着
9	手づくね土器	2層	口径 3.9 器高 4.3	内外面とも磨滅	ほぼ完存	

表3 遺構外出土遺物 観察表

	器種等	出土 Gr	法量 (cm)	調整等	残存	時期	胎土(産地)	備考
10	土師器 高坏 脚柱部	B-8	脚柱高 5.1	内外面とも磨滅 穿孔あり	脚柱部ほぼ完存	月影式期ないしは白江式期		
11	土師器 高坏 脚柱部	D-7	脚柱高 6.5	内外面とも磨滅	脚柱部ほぼ完存	漆町編年 10～11 群期		
12	土師器 高坏 脚柱部	C-7	脚柱高 4.7	内外面とも磨滅	脚柱部ほぼ完存			
13	土師器 甕 把手	C-5	長さ 5.5 最大幅 3.6	外面：ナデ	把手(片側)完存			
14	土師器 ミニチュア土器	C-9	底径 2.3	外面：磨滅 内面：ナデ	体部から底部ほぼ完存			
15	須恵器 坏蓋	B-7・D-5	口径 13.8		口縁端部 1/32 口縁・天井部境界 1/8	古墳 4 様式Ⅱ 1	南加賀窯	
16	須恵器 坏蓋	B-9	口径 13.6	天井部外面：回転ヘラ削り	口縁端部ごくわずかに 口縁・天井部境界 1/16	古墳 4 様式Ⅱ 1	南加賀窯	
17	須恵器 坏蓋	C-6・C-11	—	天井部外面：回転ヘラ削り	天井部 1/4	古墳 4 様式Ⅱ 1	南加賀窯	
18	須恵器 坏蓋	B-5・B-6 B-7・C-7	口径 15.3 ～11.6 か?	天井部外面：回転ヘラ削り	口縁部 1/4 天井部 1/2	古墳 4 様式Ⅱ 1	南加賀窯	器形の歪み著しい
19	須恵器 坏	B-8・D-8	受部径 14.2	底部外面：回転ヘラ削り	受部 1/16	古墳 4 様式Ⅲ	南加賀窯	
20	須恵器 坏	B-7・B-8 C-2・C-4 C-5・C-7	口径 13.2 器高 4.0	底部外面：不整方向の粗いヘラナデ	口縁部 1/8 体部約 1/2	古代Ⅰ 1	南加賀窯	

	器種等	出土 Gr	法量 (cm)	調整等	残存	時期	胎土(産地)	備考
21	須恵器 坏	B-5・B-6 C-4	口径 13.8		口縁端部ごくわずか 受部 1/4	古代Ⅰ 1	南加賀窯	
22	須恵器 高坏蓋	B-6・B-8 C-6・C-7 C-8・C-9	口径 15.8 器高 5.9	天井部外面：回転へ ラ削り	口縁部 1/16 天井部 3/4 つまみ部ほぼ完存	古墳 4 様式Ⅱ 2	南加賀窯	
23	須恵器 坏蓋	C-7・C-8	口径 15.8 器高 2.4	天井部外面：回転へ ラ削り	口縁部 5/16 つまみ部完存	古代Ⅲ	南加賀窯	転用硯
24	須恵器 坏蓋	D-2	口径 15.0		口縁部 1/8	古代Ⅱ 3～Ⅲ	南加賀窯	
25	須恵器 坏蓋	B-7・C-6	口径 14.0	天井部外面：回転へ ラ削り	口縁部 3/16 天井部 7/16	古代Ⅳ 2	南加賀窯	
26	須恵器 坏蓋	B-7	口径 15.0 器高 3.4		口縁部 1/16 天井部 1/4 つまみ部ほぼ完存	古代Ⅳ 2	南加賀窯	転用硯
27	須恵器 坏蓋	B-8	口径 16.4		口縁部 1/16 天井部 3/16	古代Ⅴ 1	能美窯	
28	須恵器 坏蓋	B-7・B-8 C-8	口径 16.2	天井部外面：回転へ ラ削り	口縁部 3/8 天井部 1/2	古代Ⅴ 1	南加賀窯	
29	須恵器 坏蓋	C-11	口径 15.6		口縁部 1/8	古代Ⅴ 1	南加賀窯	
30	須恵器 坏(台付)	B-7・C-7	口径 14.3 器高 4.1		口縁部ごくわずか 底部ほぼ完存	古代Ⅱ 3	南加賀窯	
31	須恵器 坏(台付)	B-7・B-9	口径 14.8 器高 3.4		口縁部 1/4 底部(高台) 1/16	古代Ⅲ	南加賀窯	
32	須恵器 坏(台付)	B-7・B-9 C-9・C-10	口径 16.0 器高 3.6		口縁部 1/16 底部 5/16	古代Ⅲ	南加賀窯	
33	須恵器 坏(台付) 底部	B-4	底径 11.8		底部 5/16	古代Ⅱ 3	南加賀窯	
34	須恵器 坏(台付) 底部	D-4	底径 9.0		底部 3/16	古代Ⅴ	南加賀窯	
35	須恵器 坏(台付) 底部	C-9	底径 9.0		底部 1/8	古代Ⅴ	南加賀窯	
36	須恵器 坏(台付) 底部	B-9	底径 8.0		底部 1/4	古代Ⅳ 2	南加賀窯	
37	須恵器 坏(無台)	C-5	口径 11.8 器高 3.0		口縁部 1/8 底部 1/2	古代Ⅳ 2	南加賀窯	
38	須恵器 坏(無台)	B-7	口径 13.4		口縁部 1/8	古代Ⅳ 2	南加賀窯	
39	須恵器 坏(無台)	B-8・C-7	口径 13.8 器高 3.4		口縁部 5/16 底部 3/8	古代Ⅳ 1	南加賀窯	
40	須恵器 坏(無台)	D-4・E-6	口径 13.8 器高 3.0		口縁部 1/8 底部 1/4	古代Ⅳ 2	南加賀窯	
41	須恵器 坏(無台)	B-8・C-6 C-9	口径 12.8 器高 3.6		口縁部ごくわずか 底部 1/8	古代Ⅱ 3	南加賀窯	

	器種等	出土 Gr	法量 (cm)	調整等	残存	時期	胎土 (産地)	備考
42	須恵器 盤 (無台)	C-3	口径 14.8 器高 1.9		口縁部ごくわずか 底部 3/16	古代V	南加賀窯	
43	須恵器 盤 (無台)	C-4	口径 15.0 器高 1.8		口縁部 1/8 底部 1/8	古代V	南加賀窯	墨書土器 「美」か?
44	須恵器 皿 (台付)	C-4・D-3	口径 12.2		口縁部 1/16	古代VI 3	南加賀窯	外底面に糸 切り痕 (磨 滅著しい)
45	須恵器 碗 (台付) 底部	C-5	底径 8.0		底部 1/8	古代VI 3	南加賀窯	外底面に糸 切り痕 (磨 滅著しい)
46	須恵器 碗 (台付) 底部	B-6	底径 7.0		底部 11/16	古代VI 2	南加賀窯	
47	灰釉陶器 碗 底部	C-5	底径 8.2		底部 1/4	黒笹 90 号窯式	猿投窯	
48	須恵器 中甕 頸部	D-7	頸部径 28.4	肩部外面：叩き→カ キ目 体部内面：当て具痕	頸部 1/8	古代IV	南加賀窯	同一の体部 片あるが、 接合できず
49	土師器 甕 口縁部	B-11	口径 19.0	内外面とも磨滅	口縁部 1/16	古代VI 3	南加賀窯	
50	土師器 甕 口縁部	B-9	口径 22.2	内外面とも磨滅	口縁部 7/16	古代VI 2	南加賀窯	同一の体部 片あるが、 接合できず
51	土師器 甕 把手	C-7	—	内外面とも磨滅	把手 (片側) 完存	7 世紀後半～ 8 世紀前半		同一の体部 片あるが、 接合できず
52	土師器 碗 (無台) 底部	B-5	底径 4.9	内外面とも磨滅	底部完存	中世 I 1～II		
53	土師器 碗 (台付) 底部	C-7	底径 7.0	内外面とも磨滅	底部 3/8	古代VI 2～3	南加賀窯	
54	土師器 碗 (台付) 底部	C-8	底径 6.6	内外面とも磨滅	底部 5/8	古代VI 2～3	南加賀窯	
55	土師器 碗 (台付) 底部	B-11	底径 7.6	内外面とも磨滅	底部 1/4	中世 I 1		
56	土師器 碗 (台付) 底部	D-3	底径 5.6	内外面とも磨滅	高台端部ごくわずか 底部完存	古代VII		
57	土師器 碗 (台付) 底部	D-8	底径 7.4	内外面とも磨滅	底部 1/2	古代VII	南加賀地域	
58	中世土師器 皿	E-3	口径 8.0 器高 1.5	内外面とも磨滅	口縁部 3/16 底部 3/16	中世 2 I		ロクロ土師 器
59	中世土師器 皿	D-4	口径 8.6 器高 1.8	内外面とも磨滅	口縁部 1/8 底部 3/16	IV - II		非ロクロ土 師器
60	中世土師器 皿	E-5	口径 7.8 器高 2.5	内外面ナデ調整	口縁部 3/16	IV - II		非ロクロ土 師器
61	古瀬戸 袴腰形香炉	C-7	口径 7.6		口縁部ごくわずか 底部 1/8	15 世紀前半		
62	加賀焼 甕 肩部押印	C-10 (カクラン)	—		破片 (約 13 × 8cm)			湯上ユノカ ミダニ窯

	器種等	出土 Gr	法量 (cm)	調整等	残存	時期	胎土 (産地)	備考
63	加賀焼 甕 口縁部	D-9	口径 33.6		口縁部 1/16	V期		
64	青磁 碗 口縁部	B-11	口径 16.0		口縁部 1/16	13 世紀		龍泉窯系
65	青磁 碗 底部	B-8	底径 5.4		底部 1/16			
66	白磁 碗 口縁部	B-6	口径 14.8		口縁部 1/16	12 世紀か?		
67	白磁 皿 口縁部	E-5	口径 16.0		口縁部 1/16			
68	白磁 蓋	B-7	口径 3.6 受部径 6.0		口縁・受部 1/4			
69	丸瓦	C-4	—	内面：布目痕	破片 (約 8 × 8cm)	9 世紀後半～ 10 世紀	南加賀窯	
70	土錘	B-1	長さ 4.3 最大径 2.5		ほぼ完存			
71	銅銭 「文久永宝」	C-4	直径 2.6		完存	江戸時代末		重量 2.6g

	種類	出土 Gr	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
72	石核	C-8	流紋岩	5.1	4.9	2.8	89.68	
73	石鏃	B-6	黒色安山岩	3.2	1.5	0.5	1.48	
74	石鏃	B-5	玻璃質デイサイト	3.5	1.5	0.6	2.40	茎付き
75	石鋸	B-8	結晶片岩	4.8	2.0	0.8	11.81	
76	石斧 (基部)	D-4	細粒砂岩	6.7	4.8	2.4	119.62	刃部欠損

## 第5章 まとめ

今回の発掘調査は、小松市立第一小学校の校舎改築工事に伴う調査で、昭和60年に同校体育館建設に伴い発掘調査された区域の西隣を調査した。昭和60年の調査では遺構・遺物は概して希薄な状況であったとのことで、今回も同様に希薄な状況であったが、掘立柱建物跡1棟とミゾ7本を検出し、昭和60年の発掘調査区域の西側の状況を確認することができた（昭和60年の調査については本書第3章第1節（7ページ）参照）。昭和60年の調査で検出された4号溝、11号溝、10号溝は、今回の調査で検出されたSD01、SD03、SD05に続いていき、それぞれのミゾにおける遺物の出土状況は、昭和60年の調査と概ね同じ状況であった。なお、昭和60年の調査で検出された3号溝（大溝）の続きは検出されず、今回の調査区域より北側へ伸びていくと想定される。

さて、今回の調査における出土遺物についてであるが、定量の出土遺物があった遺構はSD05のみであった。その時期については、月影式期と思われるものも含まれていたが、おおむね白江式期（古墳時代初頭ごろ）に位置づけられる。遺構外遺物については、遺物箱（60×40×15cm）にして5～6箱分が出土。弥生時代末（月影式期）から中世、さらには近世の遺物が出土したが、とくに古代の須恵器が多く出土しており、印象としてではあるが、遺構外遺物の概ね4分の3ほどを占めた。

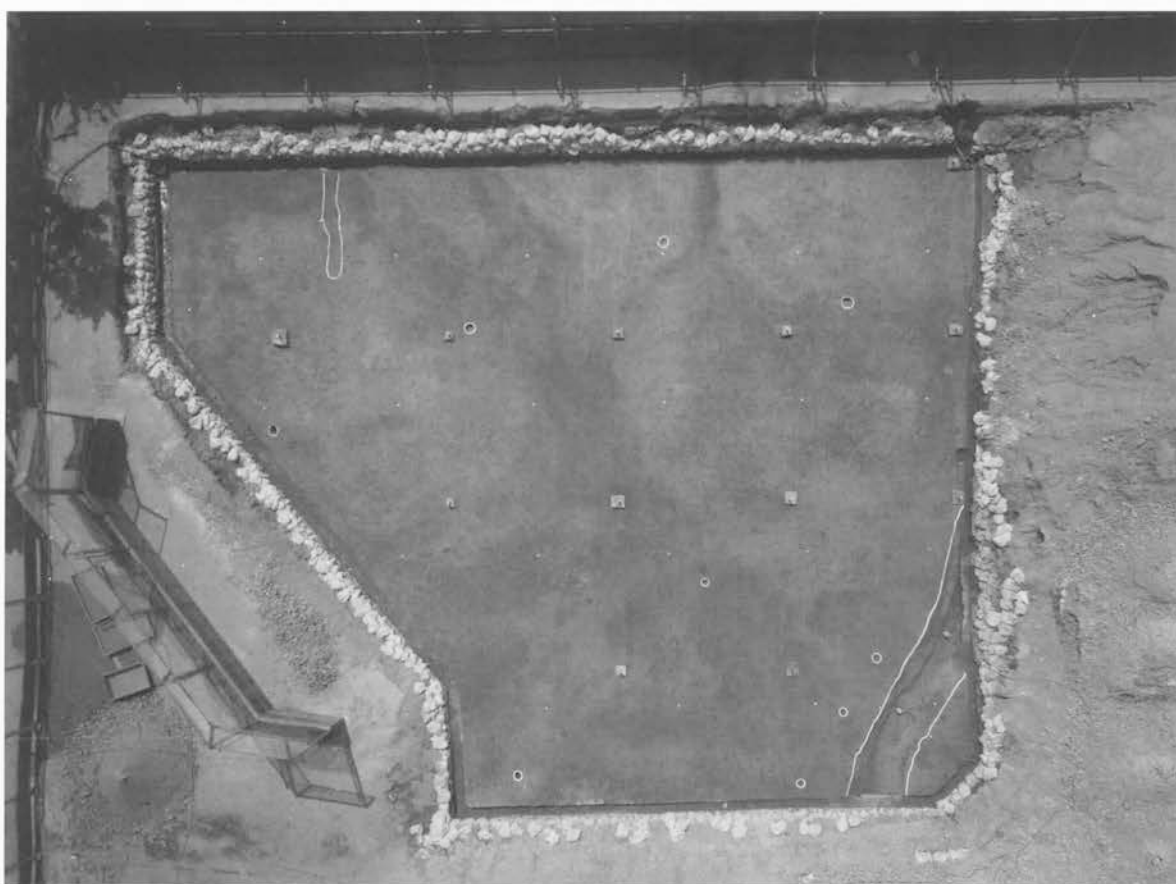
以上、調査成果をまとめてみたが、今回の調査区域における遺跡の遺存状態は決して良い状況とはいえなかった。SD04・06・07は底のみが残存していたような遺構で、おそらく、底の部分まで失われてしまっている遺構も存在していたであろう。とくに、今回の調査では、古代のものと位置づけられる遺構が確認されていないにも関わらず、遺構外遺物として古代の須恵器が多く出土した。これは、古代の遺構が失われてしまっていたことを示唆しているのではなかろうか。転用硯や墨書土器、瓦といった遺跡の性格を窺わせるような遺物が出土しているだけに、残念なことである。

以上で今回の漆町遺跡発掘調査の報告を終わりとするが、この調査・報告について厳しいご指摘・ご教示を賜れば幸いに存じる。最後となるが、今回の発掘調査・出土品整理・報告書作成にあたってご協力いただいた方々に感謝申し上げます。





1次調査区 空中写真（右側が北）

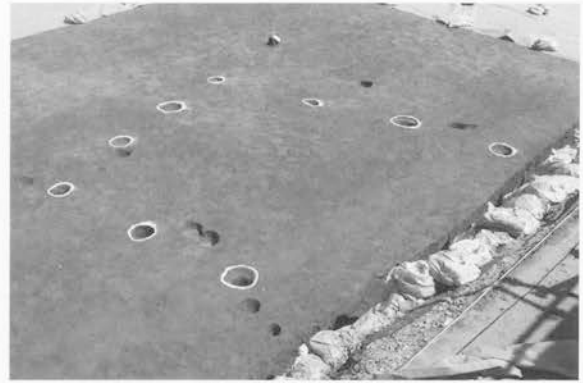


2次調査区 空中写真（右側が北）





発掘作業風景



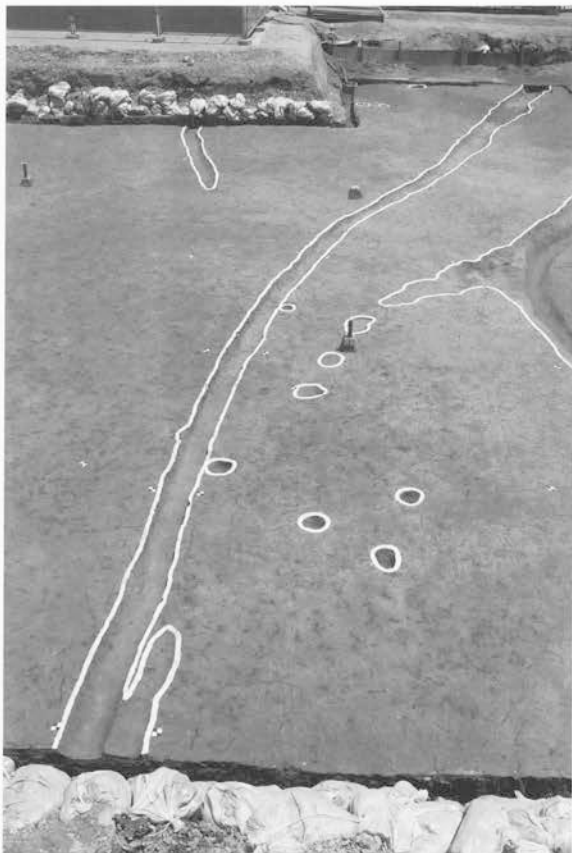
SB01 (北西から)



SD01 (西から)



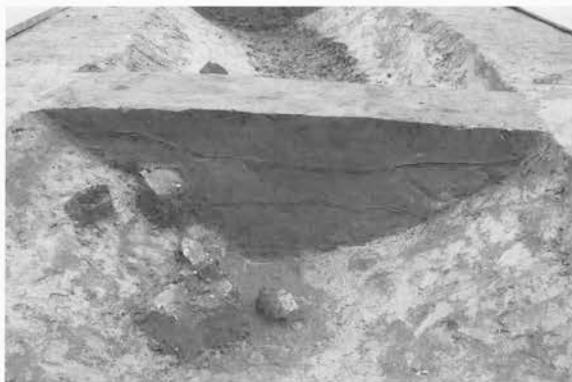
SD02 (北西から)



SD03・04・06 (西から)



SD05 (1次調査区) (西から)



SD05a-a 土層断面



SD05b-b 土層断面



SD05c-c 土層断面



SD05d-d 土層断面



SD05 遺物出土状況 (1次調査区) (西から)



SD05 遺物出土状況 近景 (1次調査区)



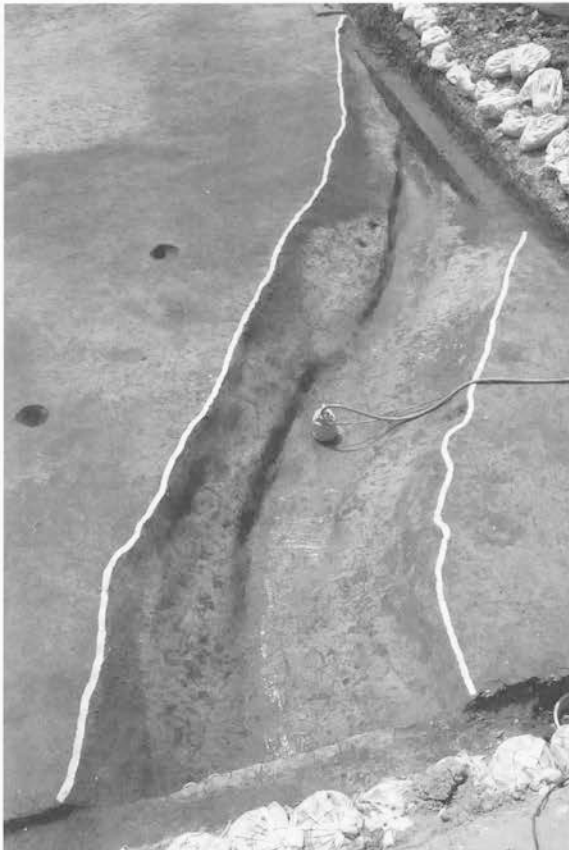
SD05 遺物出土状況 近景 (1次調査区)



SD05 遺物出土状況 近景 (1次調査区)



SD05 遺物出土状況 近景 (1次調査区)



SD05 (2次調査区) (南東から)



SD05e-e 土層断面



SD05 遺物出土状況 (2次調査区) (南東から)



SD05 遺物出土状況 近景 (2次調査区)



SD05 遺物出土状況 近景 (2次調査区)



图 19-1



图 19-2



图 19-3



图 19-5



图 19-6



图 19-9



图 20-10



图 20-12



图 20-12



图 20-11



图 20-18



图 20-20



图 20-22



图 20-23



图 21-25



图 21-26



图 21-28



图 21-30

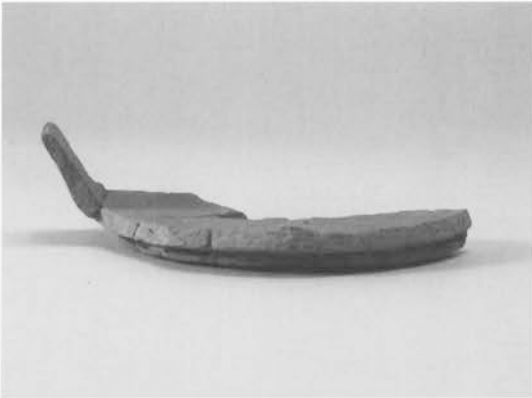


图 21-32



图 21-37



图 21-39



图 21-40



图 22-42



图 22-43



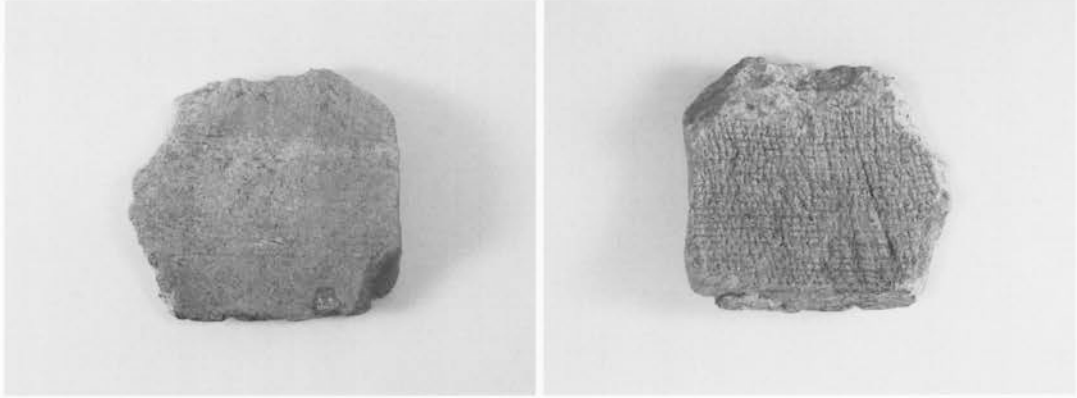


图 23-69

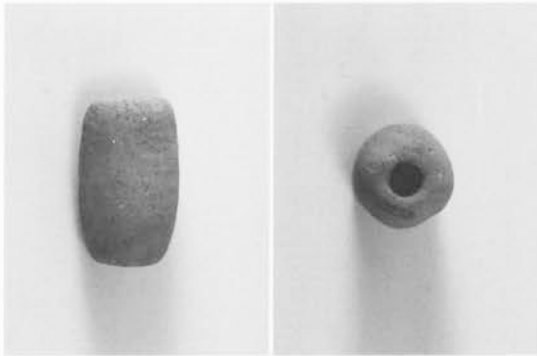


图 23-70

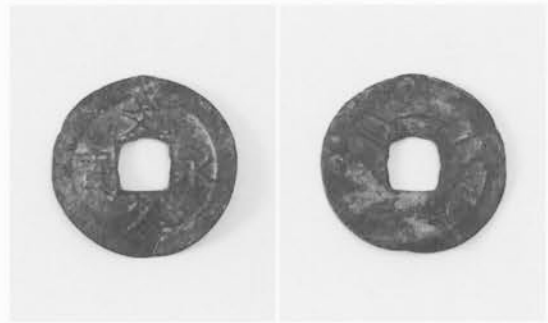


图 24-71



图 24-73

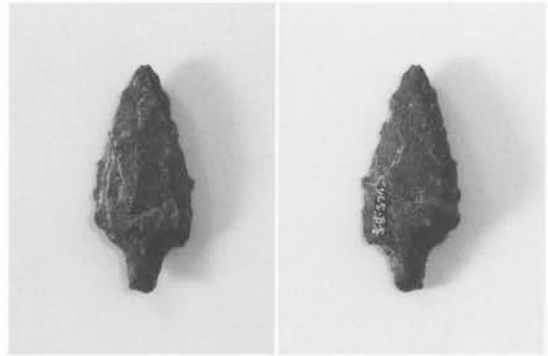


图 24-74



图 24-75



图 24-76



## 報告書抄録

ふりがな	うるしまちいせき							
書名	漆町遺跡							
副書名	第一小学校改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	津田隆志							
編集機関	小松市教育委員会							
所在地	石川県小松市小馬出町 91 番地							
発行年月日	2010 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うるしまちいせき 漆町遺跡	いしかわけんこまつし しらえまち 石川県小松市白江町	17203	03177	36° 24' 00"	136° 28' 47"	2009. 4. 6 ～ 2009. 6. 26	約 1,000	学校改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	掘立柱建物跡 1 溝跡 7	弥生土器、土師器、 須恵器、中世陶磁器、 銅銭（近世）、石器				
要約	白江式期（古墳時代初頭）の溝跡 1 本、および時期不明の掘立柱建物跡 1 棟と溝跡 6 本を検出。遺構外遺物については弥生時代末～中世および近世の遺物が出土。							

漆町遺跡

第一小学校改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年3月31日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会

印刷 鶴川印刷株式会社